

# 灘校団碁部部誌

## 2025



# 一目次一

- 部員紹介 (79回生 小澤) p.3  
小澤に部員紹介書かせたら何言われてるか分からん
- 囲碁のルール (79回生 塩谷) p.6  
ま、まさか去年のコピペだなんてあるわけ
- 囲碁部での活動について (78回生 荒谷) p.12  
僕の記事なので一番おもしろいです。
- 狂気 (80回生 田中) p.15  
さすがに半分以上冗談だと信じたい。怖い記事ランキングNo.1。
- 日置英剛先生のこと (顧問 内田) p.17  
内田先生の顧問としての考え方的なものが少し分かった気がします。
- 囲碁の打ち方 (初心者向け) (79回生 橋村) p.20  
初心者にも分かりやすく書いてくれました。
- 星の両ガカリ (80回生 後藤) p.25  
まともな記事を書いてくれて驚いています。実戦でよく出る形なのでためになります。

三コウや長生について (81回生 生田)

p.28

めちゃ面白い形です。生きているうちに1度は実戦で見てみたい。

大会報告&ピーシーズ・オブ・9路トリビア

(78回生 足立)

p.31

このタイトルは英語圏へのウケを狙ったのでしょうか。

全国高等学校囲碁選抜大会参戦記

(78回生 松崎・79回生 門川)

p.43

部誌のトリを飾るのは今年も大会の参戦記です。

# 部員紹介

79回生 小澤

高校3年生 78回生

- ・荒谷 七段

囲碁部の現部長。部内で一番強い。中日ファンなので去年も悲しんでいた。だが、流石に今年は受験生なので、野球は観ないでしょう。

- ・松崎 五段

奨励会員であり将棋もとても強い。また、そのおかげで対局時計を押すのがうまい（多分部内一）。過度の偏食である。

高校2年生 79回生

- ・門川 六段

囲碁部の次期部長。ピアノを習っているなどとても多才である。プリントなどの管理をしてくれているのでとても助かっている。とても有能です。

- ・大和 四段

ラグビー部その1。筋トレが大好き。部室に来ては一人で歌を熱唱しているかプロスターをしている。とても碁を打つのが速い。

- ・小澤 四段

この欄を書かせて頂いている者です。囲碁の歴が約2年とまだまだ浅く、よく部室に行ってはいろいろ教えてもらっています。

- ・塩谷 二段

ラグビー部その2。囲碁部の現会計であり、次期会計。後輩とも仲が良く、先輩との付き合い方も上手である。塾をたくさん掛け持ちしている。

- ・橋村 初段

卓球部やオセロサークルにも所属している。最近囲碁部に入部しており、とても学習意欲が高く、よく周りに囲碁の質問をしている。好きな色は緑であり、服は緑色のものが多い。

・坂本 2級

ラグビー部その3。彼も橋村君と同様最近入部しており、成長速度が速い。部室ではよく大和君や橋村君、後輩の後藤君と打っている印象がある。

高校1年生 80回生

・後藤 六段

部内で一番部室に来ており、いつ見ても部室にいる（多分部室に住んでいる）が、常に囲碁を打っているというわけではない。だが、部内で一番部室にいる分囲碁の実力も高い。よく後輩達に絡んでいる。

・田中 五段

一時期学校に来ていなかったが、最近学校に復帰したようである。そのせいか、なぜか元々六段あった段位が五段に下がってしまったが、今でも十分六段ぐらいの実力はある。自身が不登校だったことをネタにできるほどの強靭なメンタルを持っているようである。復帰してなにより。

・阿部 四段

上記2人と仲が良く、いつも3人で遊んでいるイメージがある。最近推しのvtuberが卒業したらしく、悲しんでいた。まだ声変わりをしていないようである。

中学3年生 81回生

・生田 六段

囲碁部唯一の81回生。灘中に首席合格するなど、とても賢い。入学の挨拶では二項定理について話すなど、とても数学が好きであり、数研にも所属している。詰碁がとても好きであり、囲碁部の期待の星ですね。

中学2年生 82回生

・柴田 六段

中2高段者その1。よく部室に来て、先輩達と打っている印象がある。とても冷静であり、同じペースで序盤から終盤まで囲碁を打っている印象がある。愛称は「しばそう」。

・藤田 六段

中2高段者その2。とても成長速度が速く、堅実な囲碁を打っている。少し天然パーマがかかっているのが特徴。

・菅原 五段

中2高段者その3。よく部室に来ており、後藤君の相手をしている。段位は五段ではあるが、上記二人に全く引けを取らない実力である。多分もうすぐ六段になるでしょう。

・木村 8級

あまり部室では見ないが、大会には結構来ている印象。まだまだ若いので、もっと部室に来たら、もっと強くなるでしょう。

・金 17級

バトミントンをしているらしく、いつもニコニコしていて楽しそうです。まだまだ初心者ですが、部室にもよく来正在して、これからが楽しみです。

・築田 17級

たまに奇怪な行動をしている。特に合宿での人狼では、リア狂をしていた。だが根は真面目で面白いので、まだ初心者ですが、将来が楽しみです。

中学1年生 & 高校1年生（新高）

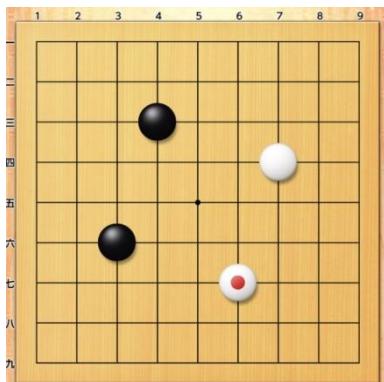
これを書いている段階では誰が灘校に入ってくるのか分かりませんが、顧問の内田先生によると、とても強い中1が入ってくるとの噂なので、期待して待ちましょう！！！

# 囲碁のルール

79回生 塩谷

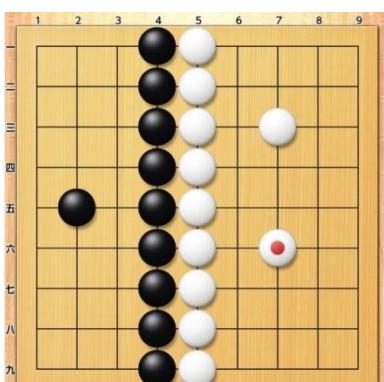
囲碁のルールはシンプルです。ここでは、囲碁のルールについて簡単に説明していきます。

## 基本的なルール



知っている方も多いと思います。囲碁は碁盤の上に、白と黒の碁石を交互において進めるゲームです。下手が黒を持ち、上手が白を持ちます。基本、下手から打ち始めますが、置き碁というあらかじめいくつか黒石を置いておくハンデ戦の場合は、白から打ち始めます。下図のように線と線の交点に打ち、基本的に打つ場所は自由です。

## 陣取りゲーム

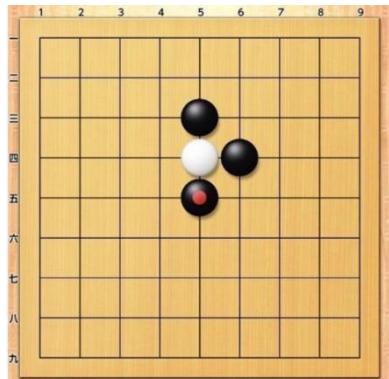


囲碁は簡単に言うと、「陣取りゲーム」です。自分の陣地を「地」と言い、最終的に地が多い方が勝ちです。上図でいうと、白の地の方が黒の地より大きいので、白の勝ちとなります。自分の陣地か否かの判断は難しいですが、上達とともに分かってきます。最初は自分の石で囲ったところだという認識でよいと思います。

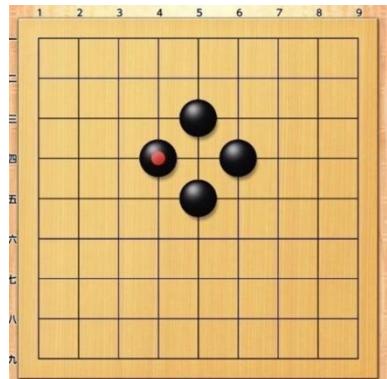
## 相手の石は囲めばとれる

相手の石を囲めばとれるというルールは多くの方が知っているのではないでしょうか。例えば、下の【図1～2】のように白石を囲むことで、白石をとれていることが分かります。また、複数の石をとることも可能で、【図3～4】のように囲めば白石をとれます。そして、

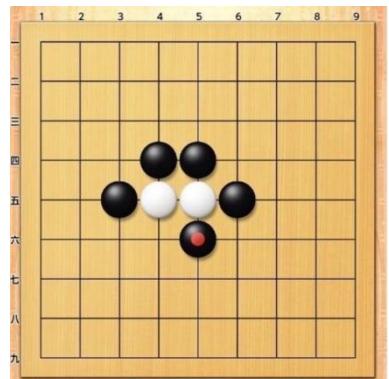
端の線上の石は 【図5～6】、【図7～8】のようにして線の外を囲まなくてよいので、少ない手数でとることができます。色々な入り組んだ形のものが実戦では登場しますが、囲めばとれることに変わりありません。



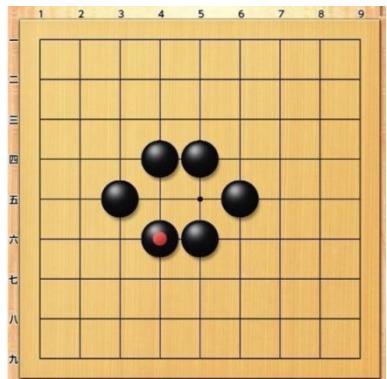
【図1】



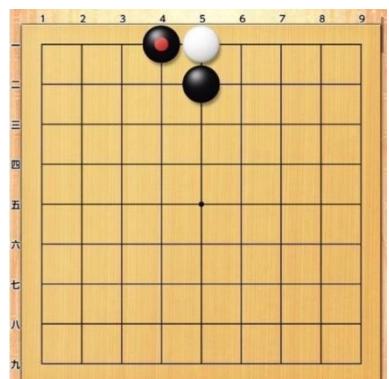
【図2】



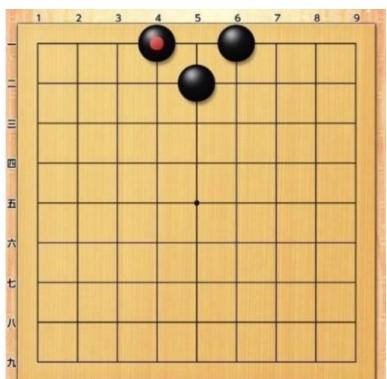
【図3】



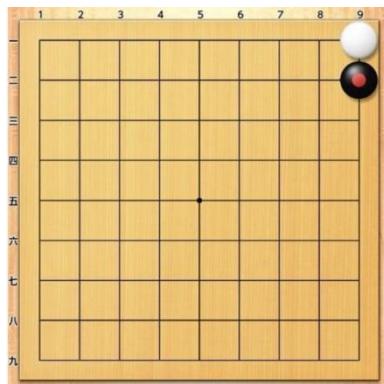
【図4】



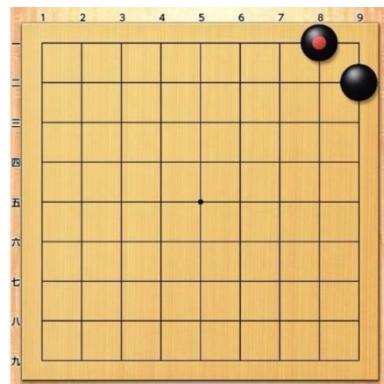
【図5】



【図6】



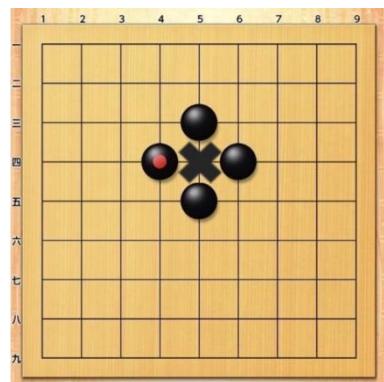
【図 7】



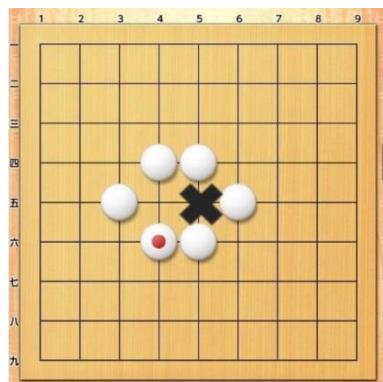
【図 8】

### 着手禁止点

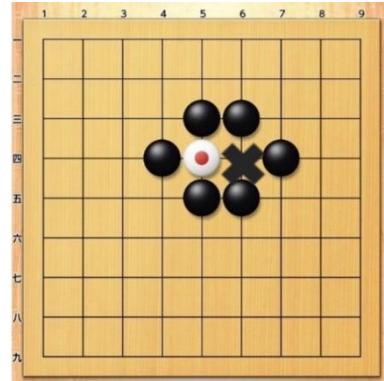
最初の方に、「基本的にどこに打ってもよい」と言いましたが、打ってはいけないところもあります。それを、「着手禁止点」と言います。具体的には、既に相手の石に囲まれているようなところです。例えば、【図 9】では×のところには打てません。また、【図 10】では×のところに石を打ってよいですが、【図 11】では×のところに打ってはいけません。ただ、これには例外があり、相手の石をとるときには、着手禁止点に打つことができます。つまり、【図 12】のときは、【図 13】のように石を取ることができます。



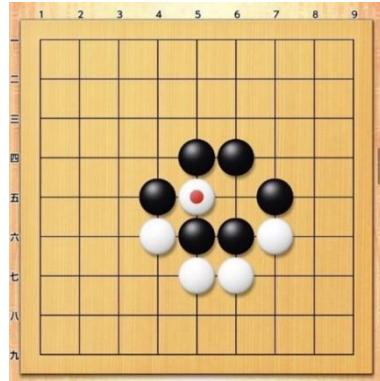
【図 9】



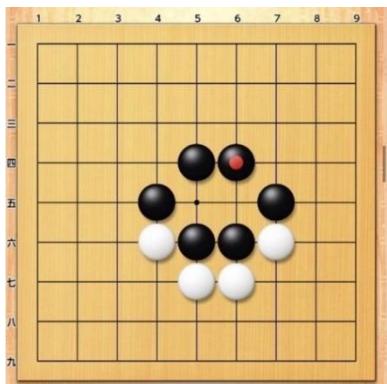
【図 10】



【図 11】



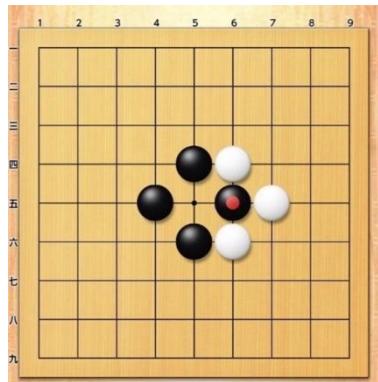
【図 12】



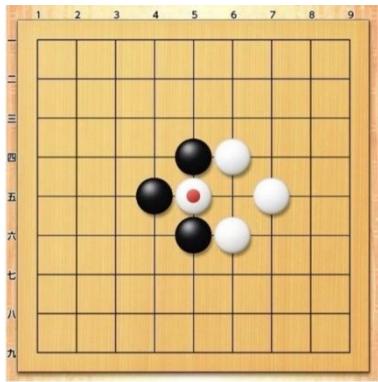
【図 13】

### コウ

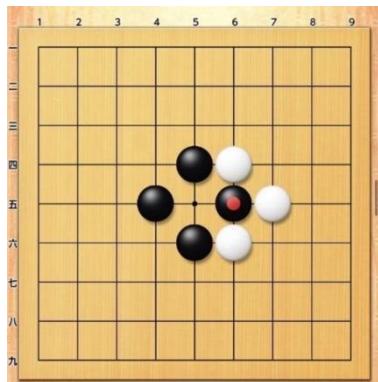
お互いに一つの石を取り合う形を「コウ」と言います。この形が出てくると、【図 14～16】のように 石の取り合いがずっと続いてしまいます。なので、「直ぐに取り返すことができない」というルールが存在します。例えば、【図 14～15】のあと一旦、【図 17】と別のところに打ちます。この手を相手が無視すれば、【図 18】となってコウが終わりります。この形は、よく実戦で出てきます。



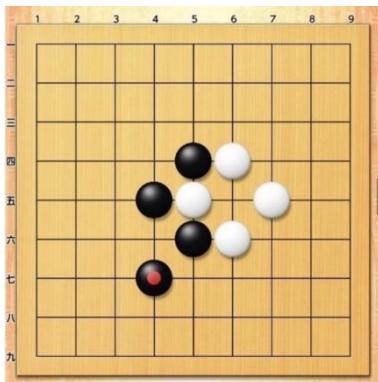
【図 14】



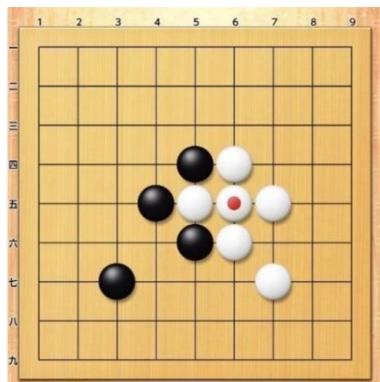
【図 15】



【図 16】



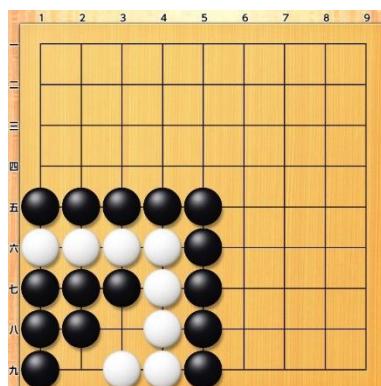
【図 17】



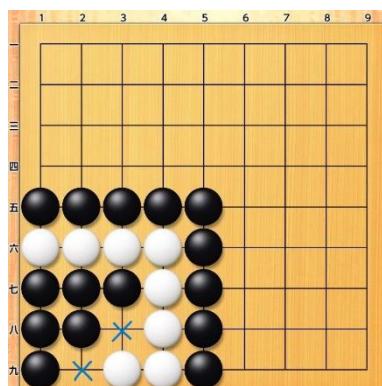
【図 18】

### セキ

お互いに相手の石を取りに行こうとすると、逆に自分のほうが取られるので、どちらも手が出せずに生きを保っている状態。例えば【図 19】の場合、お互い【図 20】の×の部分に打つと石をとられてしまうのでお互い置くことができません。



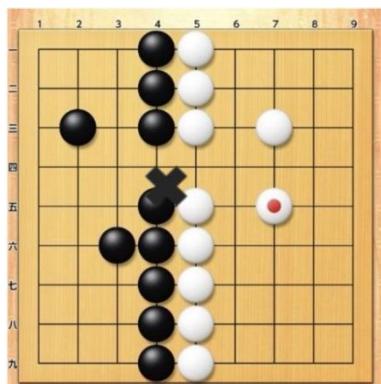
【図 19】



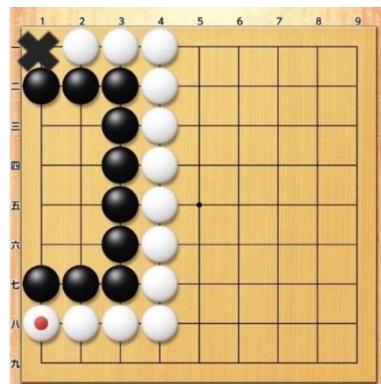
【図 20】

### 終局の仕方

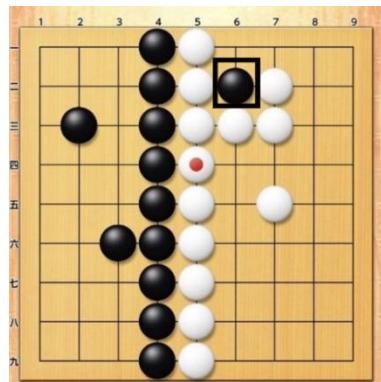
試合を終えることを「終局」と言います。お互いが自分の手番を続けて「パス」と宣言することで対局は終わります。パスと宣言するタイミングは、もう打ってもお互いに得がないと判断した時です。例えば、【図 21】では×のところがまだ地が確定していないので終わません。また、【図 22】において×は白の地でも黒の地でもない点です。この点を「ダメ」といい、埋めなければなりません。そして、お互いにパスを宣言した後は、地を数えあいます。そこでまず、【図 23】でいうと四角で囲まれたような既に死んでいる石と、試合中に取った石を相手の陣地に埋めて相手の陣地を減らします。そして地を数えあい、地が大きい方が勝ちというわけです。



【図 21】



【図 22】



【図 23】

### 最後に

このように囲碁のルールはいたってシンプルです。ただ、それ故に自由度が高く理解するのに時間がかかるでしょう。特に石が死んでいるか生きているかなどは理解するのに時間がかかるでしょう。しかし、それ故にとても奥深いと言えます。以上で簡単なルール説明を終わりります。

# 囲碁部での活動について

78回生 荒谷

はじめに

78回生の荒谷と言います。前回の文化祭から今回の文化祭までの1年間部長をやらせて頂きました。この文化祭の囲碁部の責任者でもあるので部誌（これ）の編集をしなければいけないので、期限はあと3日。ますます。そもそも僕個人の書く記事すらできていなければいけないのに、期限はあと3日。まずすぎる。そもそも僕個人の書く記事すらできていない。ということで、囲碁部での活動について、僕個人の体験も交えつつ語ることにします。~~それならサタッと書けるぜ。~~

## 1 普段の活動について

囲碁部の部室は、文化部長屋という散らかった空間の奥地にあります。碁盤がちょうど6面置けるぐらいの広さです。この部室も例に漏れずお世辞にも綺麗とは言えず、碁石が落ちていたり部員の教材が積まれていたりする他、OBの柔道着や成績表やその他諸々が出てくることもあります。特に碁石については気を付けるようにしているのですが、灘校生のズボラさを止めることはできないです。囲碁の神様ごめんなさい。

部員は昼休みと放課後に集まります。特に曜日とかが指定されている訳ではなく、暇なやつが来ます。最近だと80回生と82回生はよく集まります。特に82はよく囲碁を打っています。えらい。80も（スマホに）熱心です。今年も新入部員がたくさん入ってきてくれたら嬉しいな。

ありがたいことに本がたくさんあり、AIも利用できるので、部員の成長は目覚ましいです。環境に感謝。

## 2 合宿について

囲碁部は、年に夏と春の2度合宿を行っています。

夏合宿は、あの開成と3泊4日間合同で行うというのが昔からあったのですが、コロナ禍で一度途切れ、2023年に復活。2024年は駒場東邦と3校合同で行われました。3校合宿の時は、人数はOBを含めて（多分）60人を超えており、大人数が集まって囲碁を打てる貴重な機会でした。リーグ戦とか団体戦とかペア碁とか、いろいろできました。

春合宿は、灘校囲碁部OBが主に集まる「種石会」が主催の2泊3日で、OBの方がたくさん来てくれます。今年のはちょうどこの記事を書いている日の2日前までありました。対局は勝ったら2上上がり、負けたら2下がるといったレーティング形式で行われます。レートが下がっていくとメンタルに来るシステムです。現役生のレートを刈り取る

OB、通称老害が毎年世の中の厳しさを教えてくれます（？）。僕も来年からそっち側だぜ。

どちらの合宿も囲碁を打つだけで、外に出て何かをするということは特にありません。  
~~やはり陰キャなのかもしない。~~

### 3 大会について

まずは中学の大会について。これまで中学生はほとんど大会がなかったのですが、2025年夏から中学団体戦が復活します。歓喜。僕はもう出られないのですが、灘中生なら全国優勝してくれることでしょう（無茶振り）。個人戦では、少年少女に灘校生が出られたらいいですね。

次に高校の大会について。高校に入ると、大きな大会が一気に増えます。

特に大きいのは、夏の高校選手権と、冬の選抜大会です。高校選手権は、団体戦が県から1校で計48校、個人戦が県から2人で計96人（だったと思う）集まります。団体戦の方は、灘校はかなりの年数連続で全国大会に出ているそうです。僕も高1、高2の時に主将として出させて頂いて、それぞれチームで全国6位、7位でした。高3でも出るつもりなので、よりいい順位を取れるように頑張ります。個人戦には、残念ながら今のところ僕は縁がありません…。選抜大会は、団体戦がブロック（「近畿」とか「関東」とか）から2校で計16校、個人戦がブロックから2校で計16人集まります。こちらも団体戦は2年間主将として出させて頂いており、それぞれチームで全国4位、3位でした。3位だった方（ついこの前）の大会の参戦記は、他の人が別の記事として書いてくれています。個人戦の方は、高1の時に運よく近畿2位が取れて出場することができたのですが、結果はひどかったのでここでは言いません！（一応調べれば出てくると思います）

他にも、全国総文や近畿総文といった大会があります。総文というのは総合文化祭の略です。他よりは気楽に臨める大会で、割と観光とかもできます。全国総文は開催地が47県で回り持ちで、僕が参加できた高1の時の方は鹿児島県でした。楽しかったなあ。近畿総文も開催地が近畿2府8県（!？）で回り持ちで、僕の2年間は三重県、福井県でした。福井県って近畿だったんだ。

あらゆる大会の予選として県大会は年に5回ほどあり、それぞれ中学生も段級位の認定をしてもらえます。

僕としては、特にこの2年間はいろんな大会に出られて本当に楽しかったし、刺激になりました。囲碁そのものも面白かったし。~~何と言っても学校の金で遠出できるし。~~

### 4 文化祭について

活動内容は見ての通りです。少しだけ文化祭準備の話を。

部誌は毎年鬼みたいなスケジュールで制作しています。今年なんてみんなが本格的に書き始めたのは合宿終了翌日の3/27。そして記事を3/28にみんなから集約して、3/30までに編集し、3/31に学校に提出。普通のブラック企業。ちなみに僕が今この記事を書いているPCの右下には3/29と書かれている。てへ。

ただ、文化祭直前にやることと言えば、碁石洗いと会場設営と部誌の製本ぐらい。会場設営と部誌の製本については見ての通りです。碁石については、外部からお客様がいらっしゃるということで、流石にしっかり洗っています。逆に言うと、碁石を洗うのは1年にこの1度きりです。種類なども分けて揃えているのですが、文化祭が終わって2週間もすれば全てごちゃまぜになってしまいます。灘校生の悪癖。

## 5 その他の活動

ここからは僕個人の話になります。

まず、僕は23年度は会計、24年度は部長をやらせて頂きました。といっても、意外とやることは多くないです。~~若干面倒くさいけど~~たまに生徒会や文化委員に必要な書類を作って送るぐらい。**偉大な内田先生**のサポートがとてもありがたかったです。

また、僕は高1、高2の時に2回、夏の高校選手権の参戦記を生徒会誌に寄稿させて頂きました。1年目は先輩に誘われて。2年目は友達に頼まれて。いい経験になりました。会誌や部誌でこういう文章を書く度に、文章の体裁が雑になっている気がします。昔はこの横線や（このカッコ）を多用することはなかったのに。

おわりに

以上、囲碁部での活動について話させて頂きました。少しでもよくこの部活について知って頂けたなら幸いです。他も個性豊かな記事（特にこの次の記事とか）が揃っているので、ぜひ読んでください。ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

# 狂気

80回生 田中

今回は囲碁で最も重要な勝ち方について解説していきたいと思います。

## 試合が始まる前から戦いは始まっている

まず皆さんに理解してもらいたいのは囲碁は心理戦だということです。つまりは相手の心を揺さぶる行動をすれば勝率が上がります。データはありません。ですが僕はこの方法が有効であると確信しているので気にしません。人の心を揺さぶるのに最も使えるもの、それは言葉です。しかし対局中に言葉を発することは基本的に許されません。なので対局前にたくさん言葉で威圧することが重要なのです。気を抜いてふにやふにやしているとなめられて勝率が下がります。データはありません。話しかけることができれば最善ですが僕はそんな勇気ないので同じ囲碁部員同士ができるだけ騒いでいます。

## 対局中に変顔を使用しよう

あなたは囲碁を打っているときにどんな顔をしていますか？僕はできるだけ変な顔をしています。もちろんずっとしているわけではありません。緩急が重要なのです。真剣な表情からたまに何の前触れもなく変顔をすることで相手をビビらせるすることができます。ただ睨むだけでもかなり効果があるので初心者はそういうところから気を付けましょう。

## できるだけ大きな音を芸術的に出そう

やはり人間だれしも大きな音には弱いものです。石を碁盤にたたきつけるように、手で時計のボタンを殴るように、そういう感覚が必要です。しかしそれだけではいけません。大きな音は本当に決めに行きたいときだけ使いましょう。やはり緩急が重要なのです。そして大きな音だったらなんでもいいというわけではありません。その時その状況によって使う音や動きを変えましょう。ピンチな時は暴力的な音を、勝ちを確信したときは余裕のある動きで煽りましょう。

## 結局は勢い

大体負ける時は対戦前の調子で負けるってわかります。狂気も勢いをつけるための心構えでしかありません。自分で自分にあった感情の乗せ方を意識して囲碁を打つと勝ちやすくなるかもしれません。

# さすがにやめたほうがいいこと

## 遅刻

僕もよくありますが間違いなくやめたほうがいいです。

## 待った

反則です。

## 挨拶をしない

挨拶はしないといけません。理由は知りませんがなんかやっておきましょう。

## 碁盤の上でご飯を食べる

次使う人が不快になるのでやめましょう。結構やりがちです。

## 碁石を人に向かって投げる

本当にやめてください。お願いします。危険です。

## 机や地面に碁石をたたきつける

くああああああああああああああああってなるのでやめましょう。

いかがでしたでしょうか。これ以上思いつかないのであとは適当になんかします。

# 狂気とは

狂気（きょうき）とは、常軌を逸脱した精神状態を表す普通名詞であるが、多分に使う側の恣意的レッテルに使われる側面もある。その概念は歴史的に多くの方法で使われた。今日、一般に異常な犯罪などの文脈においてその用語に遭遇する。ただし狂気の心理的表れと、犯罪行為の因果関係については学者の間でも議論が分かれる。確立した規準からの逸脱を行うことは、正の効果と同じように見なされるかもしれない。この場合の「狂気である」事実は、大胆に慣習にとらわれない様子などに対し、何らかの判断主体による相対的な評価を指す。

（ウィキペディアから引用）

# 日置英剛先生のこと

灘校囲碁部顧問 内田 啓(灘校 41回生)

昨年(2024年)の2月に配布された生徒会誌に、囲碁部現部長の荒谷君が兵庫県代表として鹿児島で行われた全国総文囲碁部門に参加したときの体験記が載っていた。これを読んでいてふと思い出したことがあって、部誌に文章を書きたくなった次第である。

囲碁部の全国大会(現在では高校選手権、全国総文、高校選抜と3つある)や近畿大会(特に泊まりで参加する近畿総文)のときに、私は選手たちと夕食などをともにすることが多いが、そのときはたいてい私が支払いを行う。すると生徒から見ると私がご馳走してくれた、と見えるのだろう。先の荒谷君の文章でも私への謝意が述べられていたが、実はその原資は多くの場合「奨励金」すなわち育友会(=PTA)から全国大会出場のときにもらういくばくかのお金であり、私が自腹を切っているケースはそう多くはない。

\* \* \* \*

それで思い出すのは、囲碁部顧問で国語科であった日置英剛先生のことである。日置先生は私の1つ上の学年の担任団だったので、授業での接点は少なかった(高3になったときに週1時間だけ受け持っていた)が、囲碁部のふだんの活動もとても温かく見守ってくれていて、時たまふらっと部室(当時の「長屋」、いまの放送室のあたり)に現れて碁を1局打って帰って行かれる、そんな先生であった。部活の運営で困ったことが生じたときも、先生は親身になって相談に乗ってくださった。

私が高2、高3のとき(昭和末期の1987、1988)に全国大会(当時は夏の「高校選手権」しかなかった)に参加したときに引率してくださったときも、日置先生は我々選手がベストコンディションで臨めるように、さまざまな配慮をしてくださっていた。

当時、全国大会の主催者から割り当てられていたのは、会場の日本棋院東京本院のある市ヶ谷に行くためには交通の便が良いとはいえない、六本木の駅からさらに歩いて10分以上かかる宿舎だった。現在に比べて地下鉄の路線が少なかったこともあり、多くの学校の選手たちは、その宿舎から地下鉄(非冷房車も多かった)を乗り継いで、ドアツードアで50分近くかけて会場まで移動していたのだが、日置先生は「タクシーで行きましょう」と、わずか10分少々で会場まで連れて行ってくださった。その代金もそうだし、また夕食等も日置先生に連れて行ってもらっていたが、それらはすべて先生が自腹を切ってくださっていた。

当時の先輩からの情報では、日置先生は灘校の先生のほかに、執筆の仕事\*もされていてその原稿料もあるので、先生からご馳走になって全然いいんだよ、とは言われていたが、我々としてはただただ日置先生のご厚意に甘えるだけであった。

\*日置先生の生涯を懸けての大作が「新・国史大年表」である。よければ検索してみてください。

そのおかげもあり、我々は男子団体戦で2年連続の準優勝、またその2年目には同級生の片山浩之君(現東大大学院教授)が優勝、という好成績を残すことができた。また私が卒業した直後の平成元年(1989)、ついに灘高校は男子団体戦で初の全国優勝を果たし(私も応援に行つたが、決勝は1勝1敗で最後に残った三将戦が1目半勝ちで本当にシビれた)、以来3連覇するなど、灘校囲碁部はまさに黄金期に入っていくのだが、その礎をつくってくださったのは日置先生だった、といつても過言ではないだろう。当時は様々な国際科学オリンピック等につながるコンテストは日本ではまだ開かれていなかったこともあり、全国大会レベルで活躍する部活はほんの一握りで、囲碁部はその後の全国大会5連覇(1995~1999)もあって、灘校を代表する部活の1つとなっていました。

\* \* \* \*

時は流れ、私が囲碁部顧問として灘高校に戻ってきたのは2010年のことであった。現在では大会の数も非常に増加し、選手の付き添いでそれに行く機会も多いのは幸いなことである。私としては日置先生のふるまいには全く足元にも及ばないけれど、選手の皆さんができるだけ持つ力を存分に出せるように、陰ながら自分なりにできることはしようとしているつもりではある。

ちなみに灘校で「奨励金」という制度ができたのは、私が灘校に戻ってくるよりも前のことであったのだが、そのいきさつは、日置先生が全国大会などのたびに生徒のために自腹を切っていただいているのは申し訳ない、ということになって「奨励金」の制度が創設された、と聞いている。

\* \* \* \*

ところで高校選手権全国大会の個人戦では、基本的に各県2名(東京4名)の参加枠があるが、「中学生名人の経験のある高校1年生は、別枠で参加可」という規定がある。実はこれを1988年の全国大会の顧問会議で提案したのも日置先生であった。

当時兵庫県には坂井秀至君(灘校44回生、中学生名人経験者で当時中3、その後京大医学部を卒業後プロになり、碁聖位を1期獲得)という全国的にも無敵を誇る選手がいて、「彼が

いると実質的に1枠減るので、他の選手が迷惑することになるから」という趣旨だったが、その提案はすんなり通り、以来その規定は全国の選手たちにとって広く知られるルールとなって定着した。

私としてはここ十年くらいは兵庫県の囲碁部門を取り仕切る立場にもなったので、全国総文や近畿総文などでは「チーム兵庫」として、灘高校のみならず兵庫県の選手たちが一致団結して実力を発揮できるよう、各校の先生方などに呼び掛けたうえで宿舎の手配などをまとめて行ったりもしているが、よく考えてみると、自分の所属校だけでなく県全体のことを見る視点というのも、もしかしたら私が日置先生から無意識に受け継いだのかもしれない。

\* \* \* \*

2017年11月に、日置先生は83歳で鬼籍に入られました。その3年ほど前に、用があつて先生と電話で会話したのが最後でした。

日置先生には、ここに書いていないさまざまなことを含めて、本当にお世話になりました。あらためて先生のご冥福をお祈りするとともに、灘校囲碁部のますますの発展を祈って、筆をおきます。

# 囲碁の打ち方（初心者向け）

79回生 橋村

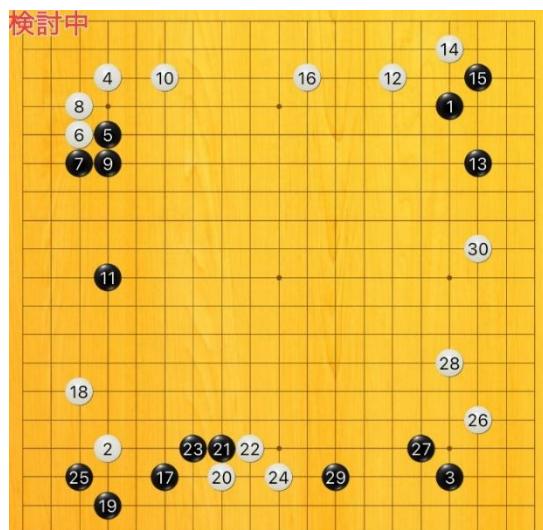
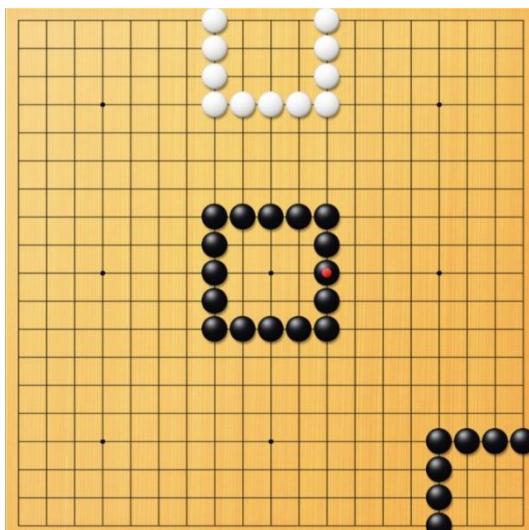
2月に兵庫県初段を取った橋村と申します。この記事では初心者に向けて、初心者がどういう風に打っていくかをお伝えしたいと思います。

**前章** 最初に、19路盤の対局の序盤、中盤、終盤に分けて何をするのかざっくり解説していきます。序盤は地(終局時に陣地として数えられるところ)にしていきたいところに石を打っていく布石をします。中盤でお互い陣地をせめぎ合いながらほぼほぼの陣地を決めていきます。(その中で隅などで時々生き死にが関わる詰碁のような盤面が出てきます。) 終盤では最大、一手で十数目程度(多くは出入り1、2目)の差が付くようなヨセと呼ばれる手を打ち合い最終的に地を確定します。

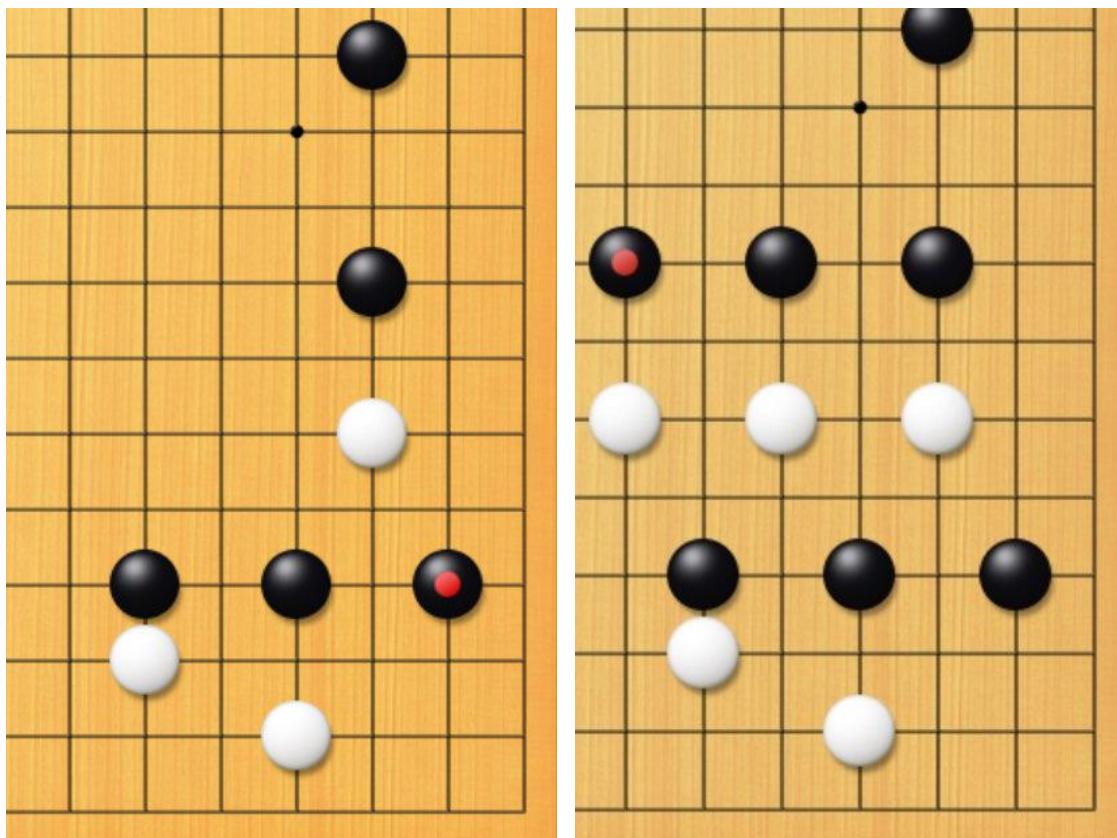
**序章 序盤の打ち方** 序盤では四隅→四辺→中央の順に打って地を作っています。理由としては、下図左のように四隅は2方向、辺は3方向、中央は4方向囲えば地になります。よって隅から打って囲いやすくなります。大体星か、小目を四箇所一回打って4つ埋めます。星は黒い丸がついている四隅の交点、小目は星の上下左右のうち、外側にある2か所(全部で8か所あります)。その後、隅が埋まり次第その隅にかかりていきます。かかりというのは隅にある相手の石に対して地にするための手がかりやねらいをもって向かって行く手です。この手は、ふんわりと角をとりにいくぐらいの認識で大丈夫です。このかかる手に対して基本的に2方向のうちの来ていない側に打つのが簡単である程度良い手です。(左下の隅以外が結果的にそうなっています。)(※他にもいろいろ手段あります)その後3.4線で、辺に展開していく、地を作っています。あくまで一例を載せておきます。

(下図右)

※左の図の三か所はすべて同じ9目の地です。

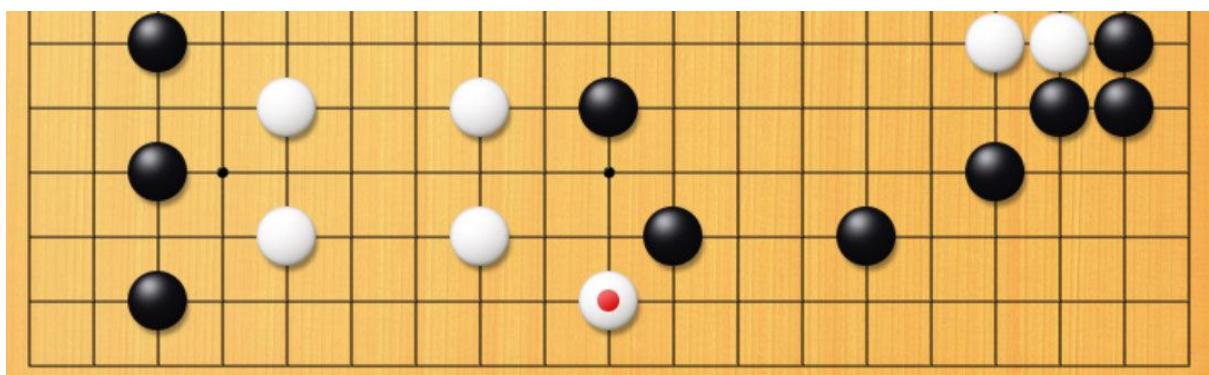
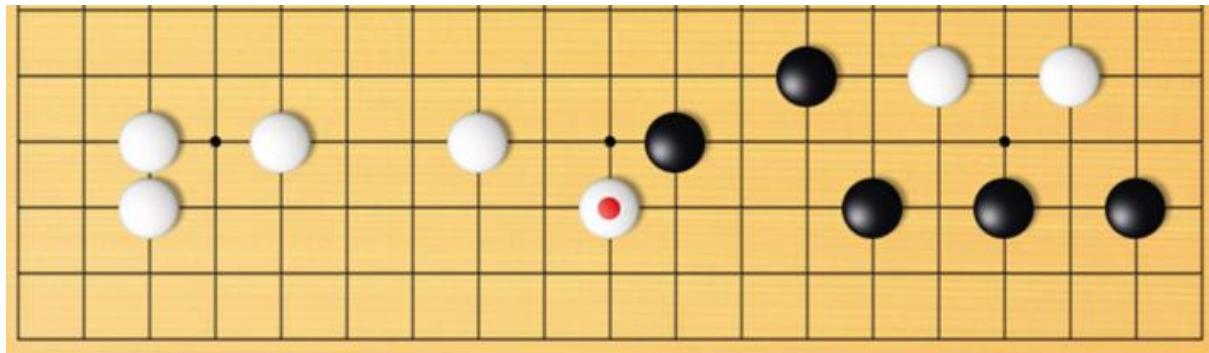


第2章 中盤の打ち方 なんとなく地がどこに出来そうかがざっくりしてきたので、自分の石と相手の石の接しているところなどを囲いながら石を打って境界線を引いていきます！この時に出来るだけ石を繋げて(相手に分断されないようにすればいいのでガチガチに繋げる必要はない)相手に自分の石をあまり取られないようにしながら出来るだけ地が増えるように境界線を引いていきます。出来るだけ自分の石が離れすぎているところの近くに相手が打ってきたら伸びたり、中央の方に飛んだりして守りましょう。その過程で相手が上手くつながらず、眼が2つ出来なそうなら相手の石を(下図)のように切っていって相手の石を軽く攻めたり、隅や辺では取りに行ったりします。眼が二つできるかどうかの判別は、お互いの手を考えて読むしかありません…

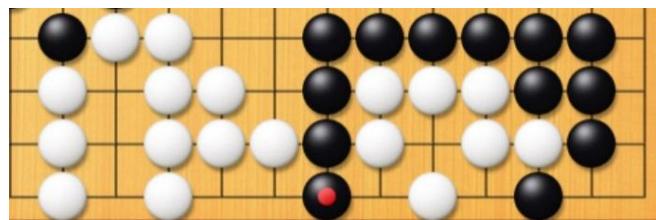
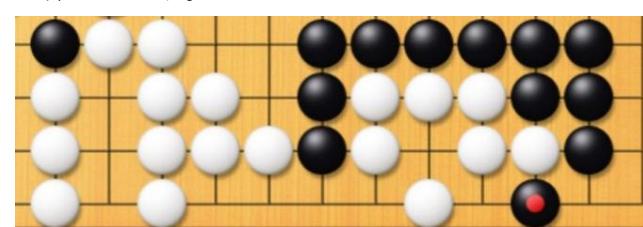


第3章 終盤の打ち方(後半少し発展的な内容です) ほぼ地がどちらへんにあるか確定したら、ヨセを始めていきます。これからは、どのヨセが大きいかどうかの判断と先手後手という考えを使って打っていきます。まず、二線三線(一番外側の線から順に一線、二線、三線、四線と呼びます)あたりの滑る手を打っていきます(次ページ上図が三線へのスベリ、下図が二線へのスベリです)だいたい四線三線は中盤でほぼ埋まっているのでこら辺の手が大きくなります。基本的に相手に滑る手を打たれたら上から抑えるか同じ線から打って地を守りましょう。対応しないと大きく地を削られます。そして、だんだん小さなヨセになっ

て行くのですが、この時にダメを詰めないようにしましょう。境界線と境界線の間とかは地が出来ないのでほぼ得をしません。むしろ、こちら側の石の生き死にや相手の石の生き死にに関わることが多いので注意しましょう！

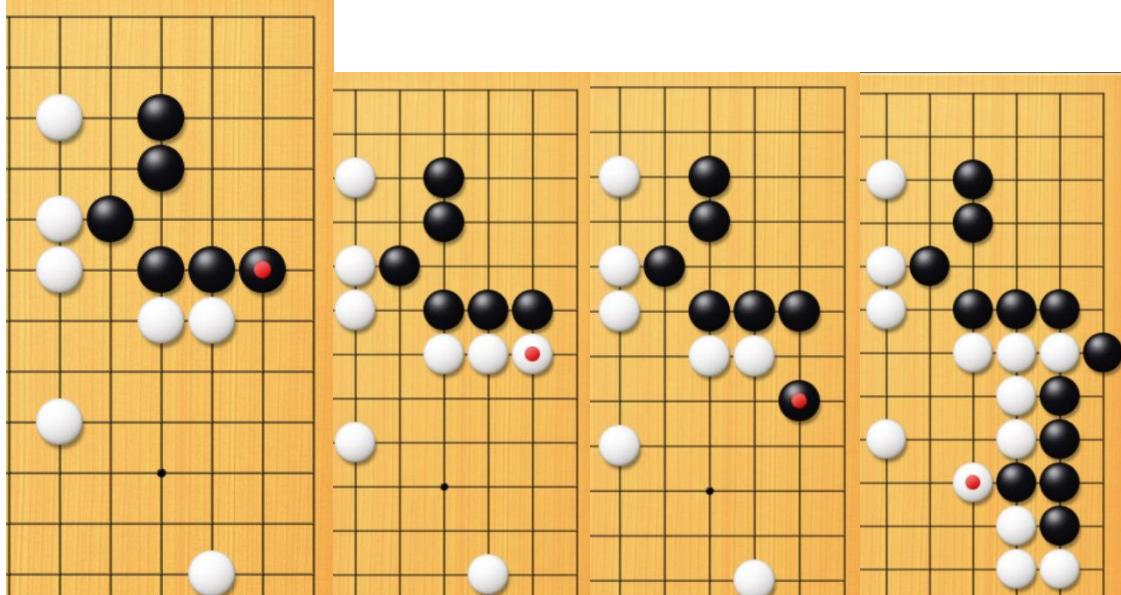


(難易度アップ)そして、先ほどの三線や二線のスベリが埋まってきたら、先手後手という考え方を積極的に用いて最大 5 目とかが変わる先ほどより小さい寄せに入っています。まず、先手後手の考え方について説明していきます。先手を持つというのは先に打ちたいところに打てるということです。例えばですが、相手が自分の打った手を無視した時に石が死ぬような手を自分が打てば相手は死なないように打ち返します。(下図左が黒からのヨセの手)手抜くと下図右のように二眼出来ずに白石が死にます。つまり白は手抜けず下図右で黒が打ったところに打って繋がります。

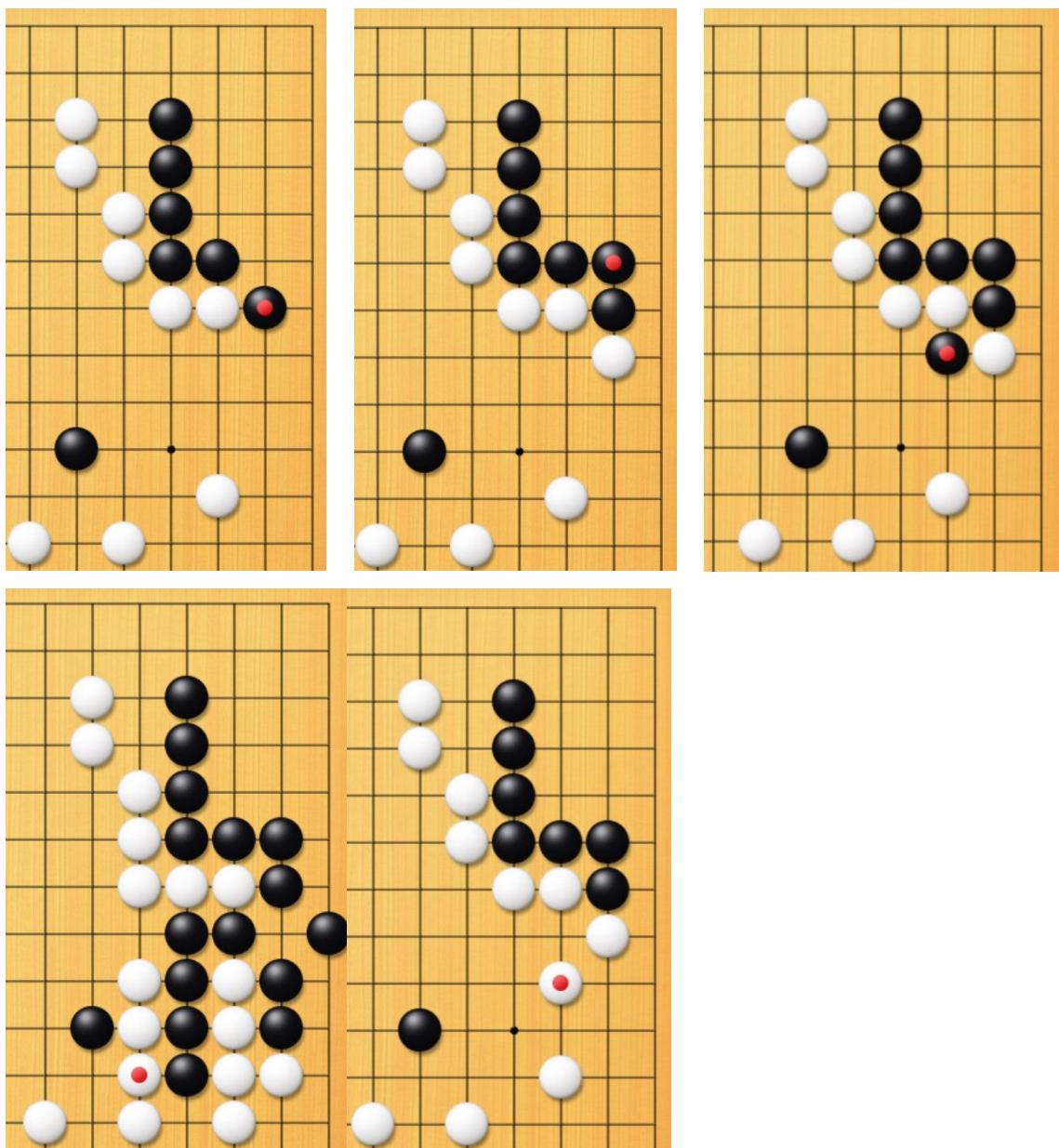


このように相手が受けた方がいい手を打ち続けられると得します。ここでも無視して損する地より、手抜いて別のところに打って大きな得をするのならそっちから打ちましょう。ちなみにヨセで、相手に大きいところを全て打たれると 20 目くらい損することがあります。つまり、先手を維持することがとても大事です。これから先手後手を意識しながら二線に打つ寄せについて詳しく見ていきます。例としてよく出てくるヨセを 2 つ紹介したいと思います。

❶二線のサガリ(下図一番左)黒番です。この時に、黒が先手(今打てる番)で、サガリを打ちます。手抜いた時に右図のようになり、20 目弱損するので、よほど大きな所がない限り白は左から二番目の図のようにほぼ必ず受けます。もし、白が無視して手抜きして、違うところに打つたら、右から二番目の図のように切られない形で出来るだけ奥に入っています。しっかりと入れる時に一線から入ってしまうと上から抑えられて全然地を稼げないので多くの場合高くから入ります。相手の地に入っている間に、他の場所で大きな寄せが残つていれば、手抜いて先手をとったまま次の場所に行くのもめちゃくちゃあります。



**②**二線のハネ(下図左上)黒番です、これももし、白が手抜きをするとさっきのサガリとほぼ同じかそれ以上の地が変わるので白はほぼ受けます。そして、白に受けられた時に黒が手抜きをするとハネた石を取られてしまいます。よってツグのですが、これでは白が手抜き出来ちゃって、白に先手を取られると思いますよね?実は状況によっては違うのです!今回は、ハネた石を抑えてきた石と、黒石と接している白の大石の間を下図右上のように切れます。すると一見シチョウで取れてそうですが、追いかけると白のニ子がアタリになってしまって、白はそれを逃すので、地が左下の図のように大幅に変わります。よって、右下の図のように守らないといけなく、ハネ→オサエ→ツギ→ツギのようになります。黒が先手を維持できます。例**①**のサガリと比べて、3目程度得します。後は一線の最大数目の寄せですが、受けとけば基本問題ないので、先手を取り続けるのだけを意識して頑張ってください。



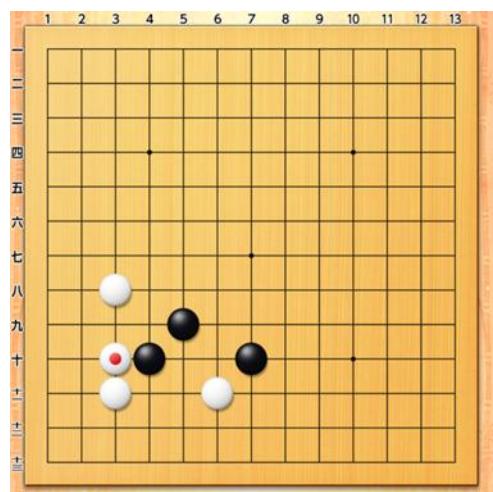
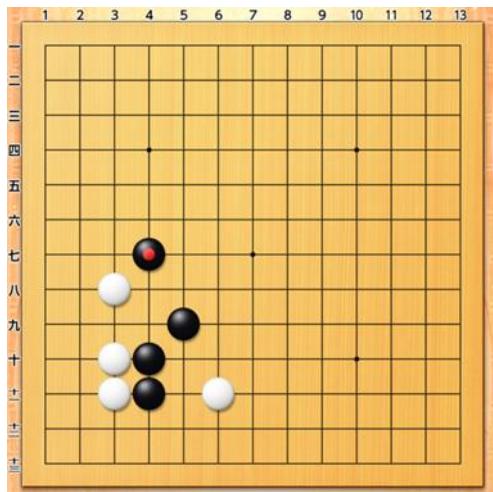
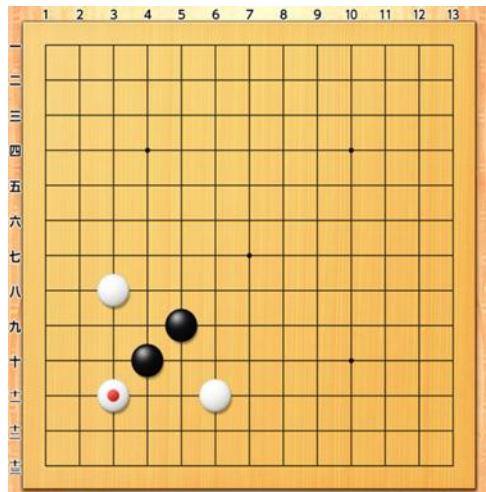
# 星の両ガカリ

80回生 後藤

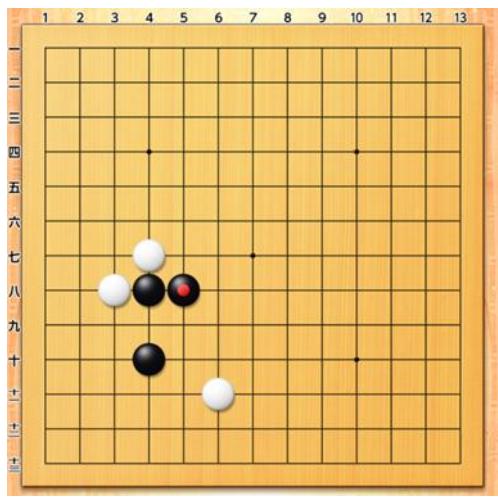
高1の後藤です。今回は星に両ガカリをされた場合について述べていきたいと思います。

星の両ガカリは序盤によく出てくる形ですが、どのように打てば良いのかわからない方もいると思います。ここでは初心者の方でも打てるような簡単な変化を説明していきたいと思います。

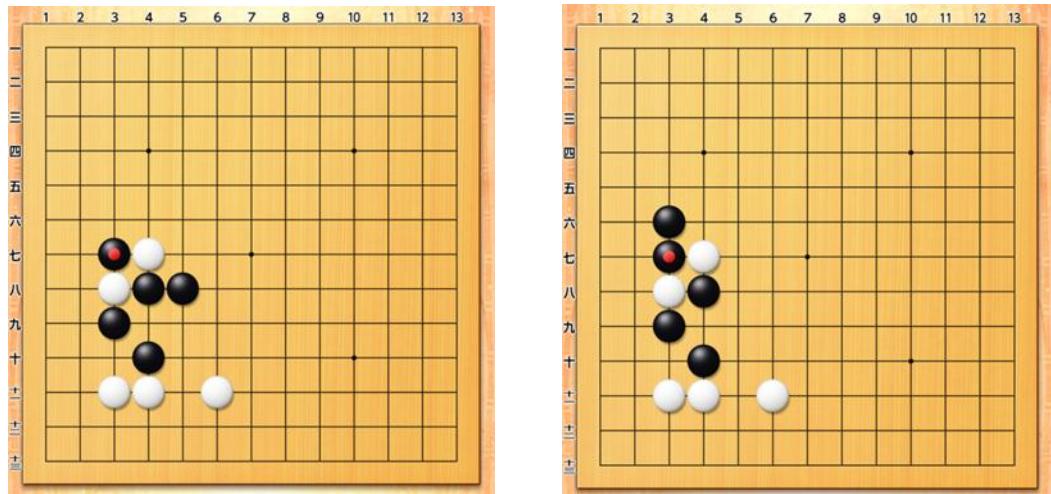
まず図1のようにコスム手が考えられます。コスミには三々がほぼ絶対の一手です。このあと黒は図2のようにオサえてからカケる打ち方や図3のようにカケていく打ち方があります。しかし、これらはほとんどの場合白が良くなっています。また、図1の状態で手抜きをして大場にまわるという選択もあります。(上：図1、左下：図2、右下：図3)



次に図4のようにツケる手について説明していきます。(上：図4)

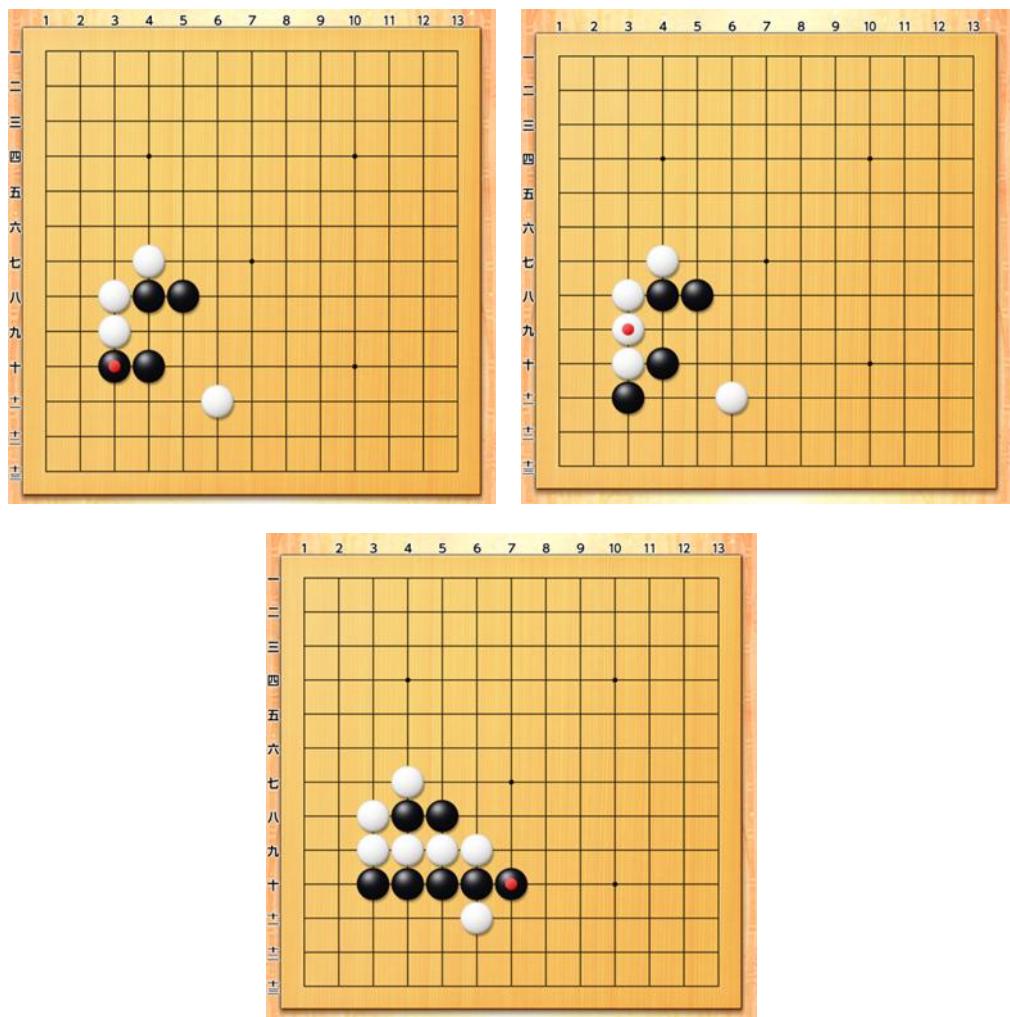


ツケには図5のように三々に入る手があります。しかし、個人的にはあまり好きではありません。なぜなら、8の十一のツメが有力なねらい筋で、白がウケなかった場合、黒の5の十二のきびしいエグリが残るからです。また、図6の星の一間バサミ定石と比べて黒は3の六にあるより5の八にあるほうが好形です。(左下：図5、右下：図6)



他にも図7や図8のような手が打たれます。この手は3の七のキリがあるので白にとって攻めづらい形にやなっています。無理に突き破ろうとすると図9のように下辺ごと黒に取られ黒有利です。

図7の場合は白から7の十や5の七がいいところで、図8の場合は黒から6の十にツケるのがいい手になります。(左上：図7、右上：図8、下：図9)



星の両ガカリは変化が多く難しいですが、皆さんもぜひ使いこなせるようになります。

# 三コウや長生について

81回生 生田

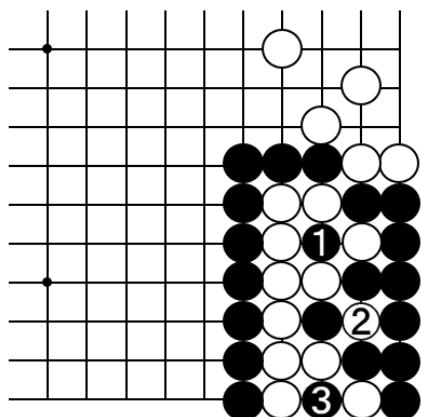
81回生の生田です。今年は三コウや長生について述べます。

囲碁にも将棋の千日手のように同じ盤面を繰り返すことがあります。例えば、三コウや長生の場合にこのようなことが起こります。これについて紹介したいと思います。

## 1. 三コウ

三コウとは、図1のように、コウが三つできた状態のことです。この状態で黒番のとき、黒1、白2、黒3、と無限ループに陥ってしまいます。

図1



このようになってしまったとき、どうすれば良いかご存じでしょうか？日本囲碁規約によれば、この場合のように同じ盤面を繰り返した場合、両者が譲らなければ対局は無勝負となります。

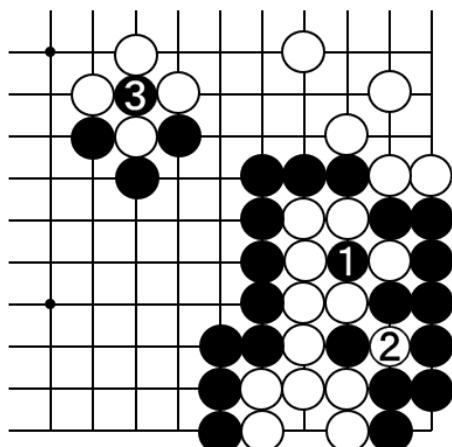
ほかにも無勝負となる例があるので、以下に紹介します。

ところで、織田信長が本能寺の変で討たれる前夜の対局で三コウが現れたとかいう逸話もあって、三コウは不吉の予兆とも言われています。

## 2. 両コウゼキ

両コウゼキとは、図2の右下のように両コウが絡んだセキのことです。一見するとセキには見えないかもしれません、たしかにセキです。

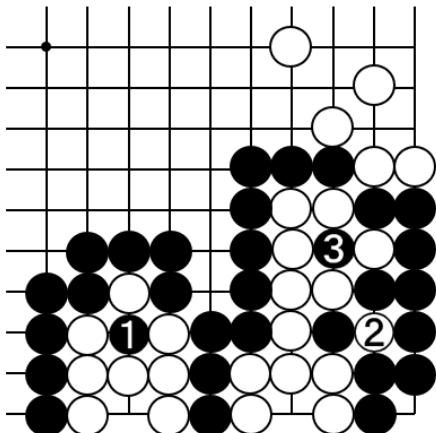
図2



両コウゼキができると厄介なことがあります。それは両コウゼキは双方にとっての無限のコウダテとなる、ということです。つまり、両コウゼキができてしまって、さらに別の場所にコウができたとすると、黒1、白2、黒3、と黒がコウを取り返せますし、さらに白も同じように打ってコウを取り返せる、つまり三コウの状態になってしまいます。なので、両コウゼキができたら高確率でその対局は無勝負となります。

もう一つ厄介なことがあります。それは図3のような場合です。  
下辺の白は一眼しかなく、死んでいるように見えます。しかし、いざ取ろうとしても、取れないのです。どういうことかというと、黒1と打ったとき、白2、黒3、白4(黒1の上)と取り返されてしまうのです。  
この状況で終局した場合、下辺の白は死んでいるのか、生きているのか、ということが問題となります。

図3(白4は黒1の上)



このことに関して次のような出来事があります。  
1253年の法深坊と刑部坊との対局で、実際にこの形が出てきました。法深坊は生、刑部坊は死と主張しては拉埒が明かないので、如仏に尋ねたところ、生きとされ、法深坊の勝利が認められた。

このことを、如仏の判決と言います。

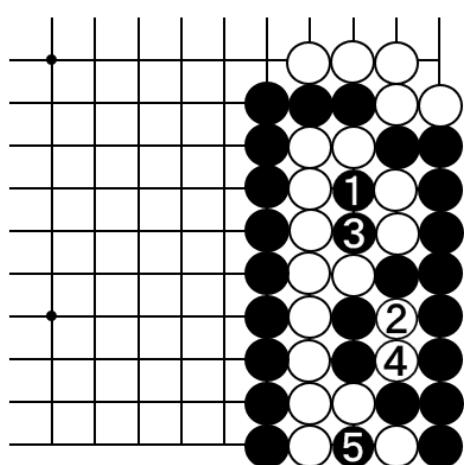
ところで現在、日本圍碁規約によれば、この状態では死とされています。これは死活確認の際にコウダテはないものとするからです。

### 3. 循環コウ、長生

最後に、無限ループに陥ってしまう形を他に二つ紹介します。

一つ目は循環コウと言われるもので(図4)。この場合も無限ループに陥るのと、無勝負となります。

図4

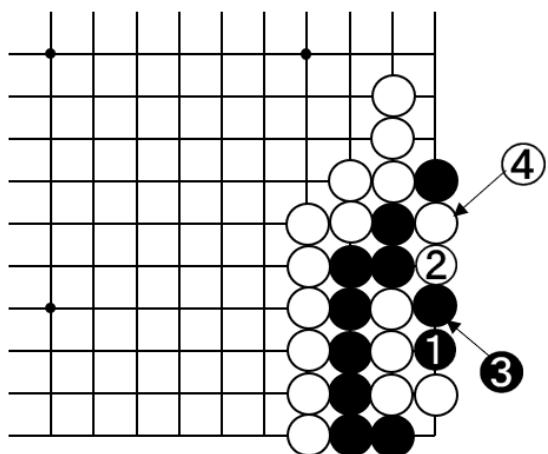


黒1と打ったときに、白が3と打ったらば下のコウを取られるので白2か4と打つしかありません。そして、黒3、白4、黒5となり、無限ループに陥ってしまいます。

最後に、長生を紹介します。長生とは死活が絡んで同じ盤面が繰り返される形で、例えば図5のような形です。これもやはり無限ループに陥るので無勝負となります。  
黒は白1と打たれては五目中手ですから、黒1と放り込むしかありません。そして

白2と取ったときに、黒3(白3と打たれたら目あり目なしとなる)、白4と打って、元の盤面に戻ります。

図5



ちなみに、長生は永遠に繰り返すので、長寿などの意味合いもあって、縁起の良いものとされています。(長生という名前は中国の長生殿でこの形ができたからであり、関係ありません。) そんな意味もあって、日本棋院の最寄り駅のJR市ヶ谷駅の床には長生の盤面が書かれています。

これらの形が現れるることは滅多にないですし、覚える必要もありません。ただ、この記事を読んでこんな形もあるんだ、と興味をもってくれば幸いです。

#### 参考文献

ウィキペディア 『コウ』

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B3%E3%82%A6>

ウィキペディア 『如仮の判決』

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A6%82%E4%BB%8F%E3%81%AE%E5%88%A4%E6%B1%BA>

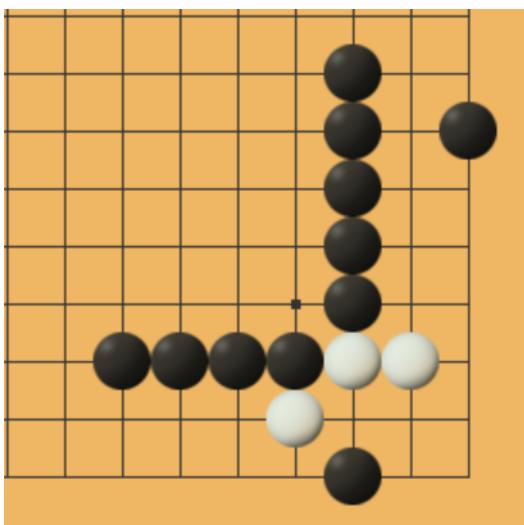
# 大会報告 & ピーシーズ・オブ・9路トリビア

78回生 足立

皆さんこんにちは、足立と申します。本日は灘校囲碁部に立ち寄っていただき、そしてこの部誌を手に取っていただいたことに厚く御礼申し上げます。さて、早速ですが私が今年出場した全国高校選抜の9路盤についての報告と、9路盤に関してのちょっとした知識について語らせていただこうと思います。

(タイトルのセンスがないのは許していただければ幸いです)

さて、まずは9路における前提知識についてお話ししていくうと思います。今日は日本ルールコミ6目半という前提（高校選抜大会ルール）に基づいて進めていきます。意外と勘違いされることの多い落とし穴についても後述しますので、お見逃しなく。



スペースが余ったので、詰碁を置いておきます。一応自作です。

白先生き 簡単に生きそうですが、右の黒1子が思わぬ落とし穴になりそうです。解けたら有段くらいですが、全変化を読み切れれば素晴らしいと思います。

(解答は最終貢にて)

## 1. 意外と知らない日本ルールの秘密

皆さんは9路盤の目算方法についてご存じでしょうか。9路盤には、実はとても簡明な目算のやり方があるのです。9路盤は、一般的には中国ルールコミ7目準拠で打たれるので、9路盤の81マスの世界では、黒の生き石+陣地が44目、白の生き石+陣地が37目（81-44）であれば持碁、それより黒が多ければ黒の勝ち、白が多ければ白の勝ちとなります。この方法に従えば、白が37目（すなわち4列+1目）より多いか否かで簡単に目算ができます。

す。しかし、これには大きな落とし穴があるのです。少し考えてみてください。

そう、これはあくまで中国ルールのコミ7目の話です。

大会ルールの日本ルールコミ6目半の話ではありません！

これが非常に厄介で、中国ルール由来の方法である場合、日本ルールに置換したときに白3  
7目の時には勝敗の判断ができないんですよね…

ではどうすればいいのかといいますと、

### ① 普通に目算する

これが一番簡明で、苦労せずに済みます。複雑に絡み合った盤面のみにおいての判断  
を下すときはこれに準拠しましょう。じゃあ単純な盤面を含むかついで終局  
図を想定したいときどうすればいいのかといいますと…

### ② 中国ルール準拠の方法を日本ルールに移し替える

それが出来たら苦労はしない、と思う方も多いでしょうが…

なんとそれができるんです。

そしてその方法についても低い知名度の割には非常に簡明なものとなっております。  
次項に行く前に、ぜひ方法について考えてみてください。

それは、白が中国ルール準拠で37目である場合、

- ・最終手を黒が打てば白の半目勝ち
- ・最終手を白が打てば黒の半目勝ち

というものです。（＊最終手以前のパスがないかつ盤面にセキがない場合に限る）この概念を覚えるだけで造作もなく半目勝負の確認ができるようになります。

暗記するだけでも非常に強力ですが、証明を下に書いておきます。

（この後の内容に影響はないため飛ばしていただいて構いません）

### 証明

黒から見た視点で考えるものとする。

中国ルールではコミを含まない盤面での目差は、  
 $\{(黒の活き石 + 黒地) - (白の活き石 + 白地)\}$  (…①)、  
日本ルールで同じように考えた時に目差は、  
 $\{(黒地 - 取られた黒石) - (白地 - 取られた白石)\}$  (…②) と  
なる。この時、中国ルールと日本ルールで生じる目差は①-②より、  
 $\{(黒の活き石 + 取られた黒石) - (白の活き石 + 取られた白石)\}$   
となり、これを言い換えると  
(黒の着手数-白の着手数) (…③) となる。  
③において、パスがない場合は白が最後に打てば着手数は同数より 0、  
黒が最後に打てば 1 となる。  
よって、白が 37 目、すなわち中国ルールで盤面黒 7 目勝ちのとき、  
黒が最後に打ったならば日本ルールに置き換えたときに 1 を引いて  
盤面黒 6 目勝ちとなるため、コミ 6 目半の日本ルールにおいては白半目勝ちとなる。  
また、白が最後に打ったならば、同様にしたときにそのまま盤面黒 7 目勝ちとなり、  
コミ 6 目半の日本ルールにおいては黒半目勝ちとなる。

証明終了

## 2. 9 路大会参戦記

小難しい話はさておき、本題である第 19 回全国高校選抜囲碁大会の 9 路部門の参戦記を書こうと思います。

まず全国大会に出るためには、当然ですが予選があります。この大会には兵庫県予選(19 路で戦います)と近畿予選(9 路で戦います)があります。今回の大会においては、個人戦では兵庫県で 19 路代表 3 人と 9 路代表 2 人が選ばれ、(順位の良い選手からどちらかを選択できます)近畿大会において 19 路盤選手 16 名中上位 3 名、9 路盤選手 12 人中上位 2 名が全国大会に進めるというものとなっております。

兵庫県予選は去年の 11 月に行われました。兵庫県の特徴として最も挙げなければいけないのが、とても強く強い選手が 2 人いるということです。 それぞれ U 君と K 君と言います。彼らと私には大きな実力差があるので勝ち目は非常に薄いですが、兵庫県では出場枠が 5 枠もあるので安心して臨むことができました。結果は 3 位で、私は 9 路盤を選びました。(なお大会はスイス式で、私は U 君の方に当たり 11 目半負けとボコボコにされました)

無事兵庫代表を勝ち取り、お次は近畿予選です。19 路盤戦には U 君、K 君、そして私達の高校の主将である荒谷君、9 路盤戦には副将である私と三将である門川君で参戦しま

した。（なお、19路はスイス式、9路は総当たりで行われます。）前日に団体戦部門で優勝していたのもあり、この三人で代表枠を独占できたら最高だなーなどと考えながら組み合わせを見ると、なんと一回戦の9路の相手が門川君でした…なんで勝ってほしい相手に当たるかなーと思いながら先ほどと一転して憂鬱な気持ちで打っていました。（総当たりなので結局当たりはするのですが、1回戦でいきなりどちらかが出鼻を挫かれるなんて最悪じゃないですか…）結果は最後の最後で門川君のミスにより半目勝ち。かなり冷や汗をかきましたが、この後の十試合は比較的楽に進み近畿大会では全勝することができました。なお、荒谷君は3勝1敗だったものの運悪く4位に、門川君は8勝3敗で4位と、二人とも惜しくも代表を逃し、悔しかったのを覚えています。（特に門川君に関しては初戦に負けをつけて勢いを削いでしまったので、申し訳なさしかありませんでした…）灘にとってはとても運の悪い大会となってしまいましたが、だからこそせめて私が全国優勝をしようと思い、全国選抜大会に気持ちを向けました。

そしてついにその日がやってきました！ 前日には団体戦があり、主将の荒谷君と三将の門川君の奮戦、そして補欠の松崎君の懸命なサポートと応援の力もあり、灘高校は3位と表彰台に輝くことができました！ 3位以内に入ることは、灘の強さを証明するのみならず、次年度の大会においての近畿からの出場校を増枠することができるゆえに来年の灘高校の助けにもなるので、喜びもひとしおでした。ということでハイになった私は応援のため（もう一泊したかっただけかもしれないけど）残ってくれた荒谷君と松崎君と夜更かしをして遊び、あまり寝ずに大会に臨みました。（正直9路はあまり体調に左右されないので、この喜びを今分かち合うのは正解だったと思います。）

さて寝ぼけ眼でぼんやり臨んだ大会ですが、初戦の組み合わせを見て一気に眠気が消し飛びました。なんといきなり前年度9路優勝、今年2連覇を狙っているM君と当たってしまったのです。（予選は2つのブロックに分けられて総当たりなのでどうせ当たるのですが、勢いってものがあるじゃないですか…）近畿予選の時といいつてないなーと思いながら1回戦が始まりました。結果はお互い全ての手で最善手を打って白を引いた私の半目勝ちでした。正直強い相手ほど正しい手を打ってくるので私の研究にはまりかなり勝つのが楽というはありましたがあくまで楽に勝つことができました。

そして、事件は起こります。

3回戦に当たったのはH君でした。19路ならかなり苦労しそうな相手ですが、9路盤なのでこちらに大いに分があり、優勢に打ち進めましたが、何を思ったのか、優勢で単純すぎる攻め合いを間違えるという大ボカをやらかし、投了。何してるんですかね…そこで精神状態がかなりぐらついてしまい、不安定になってしましましたが、応援に来てくれていた荒谷君と松崎君が励ましてくれました。有難すぎましたね。そうして少しだけ

不安定なまま臨んだ 4 回戦。相手は Y 君という方でした。正直あまり意識していなくて楽に勝てると思っていたのですが、面白い布石からの複雑な変化を打たれて、正直かなり苦戦しました。最後は何とか読み切って 1 目半勝ち。思わぬ強者の登場に一層気を引き締め、5 回戦、6 回戦と勝利し、いよいよ予選ブロック最終戦です。

最終戦で当たったのは、A 君という方です。この方は 3 勝 3 敗で最終戦に臨んでいましたが、猛者の集う関東大会で優勝してここに来たと知っていたので、一切の気を抜かずに戦いました。この対局では、私の嫌いな変化に巻き込まれて、かなり複雑な読み勝負に持ち込まれました。相手の妥協により優勢に立ったものの、甘い手を打ってしまい敗北までの筋が見えてしましたが、相手がそれに気づかずに勝ち。なぜこれほど強いのに 4 敗なんですかね… それについては後程彼に聞きましたが、どうやら苦手な白番を多く引きすぎて、私の時は黒番だから良く打てたとのことです。恐ろしい相手でした…！

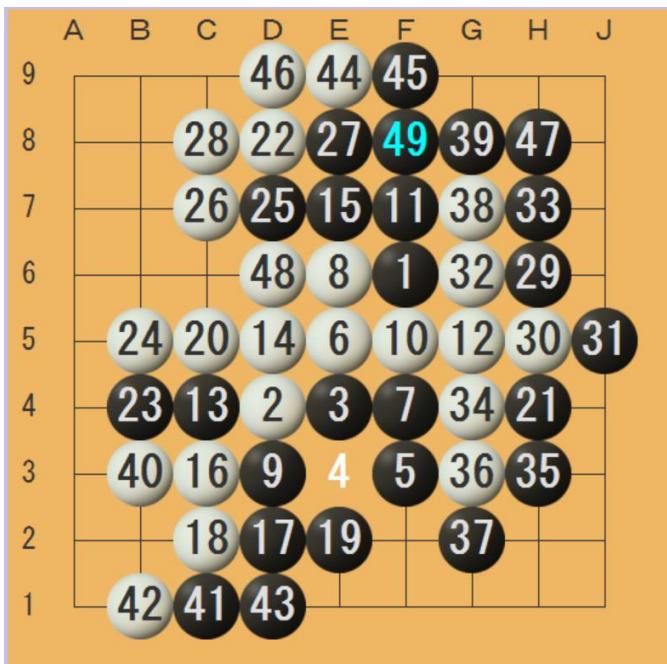
## これにて予選が終了しました！

結果は、私のブロックでは私が 1 位、M 君が 2 位、H 君が 3 位、A 君が 4 位というものになりました。そして、個人的には 6 勝 1 敗という成績になりました。個人的には少々悔しい負けがあったものの、気持ちを切り替えて決勝トーナメントに臨みました。

決勝トーナメントは、予選で分けられた 2 ブロックの上位 4 名、合計 8 名が戦います。初戦の相手は B ブロック 4 位の Y 君です。4 位ながら、B ブロック 1 位の S 君を倒していくので油断なりません。ここから棋譜を載せていきます。

私が白番で、布石は序盤から激しいものになりました。黒 9 は果敢な打ち手ですが、その変化についてはじっくり研究済みです。実戦は黒 11 がおかしく、白 12 と突き抜いては白優勢でしょう。そこからは自然な手が続きますが、白 20 が若干甘かったですね。打っていて変な感じはしましたが、やはり黒の急所でもある 2 路上に打つべきでした。実戦は黒 21 と手を抜いてくれたのですかさず白 22 と打って、勝利が確定しました。緊張していましたが、いつもの碁を打ててかなり安心していました。とりあえずベスト 4 が確定したので、絶対に優勝するしかないこの時は思っていました。

余白ができたのでアプリ紹介でもしておきます。9 路盤を練習したいなら囲碁クエストというアプリがおすすめです。そこで 9 路レートを競うのもモチベーションの一つとしてどうでしょうか。ちなみに私の 9 路レートは 2400 弱くらいです。（序盤研究で嵩増ししているだけで実際には大したことないです。）

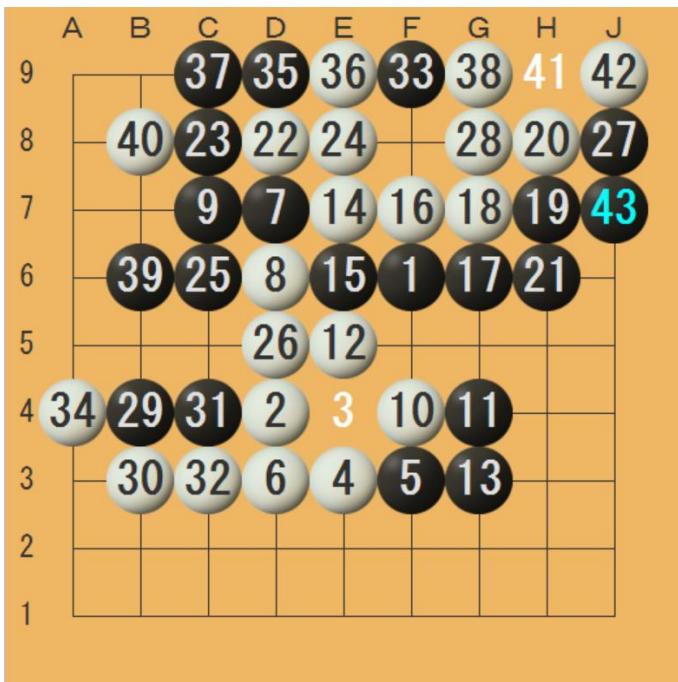


準々決勝の棋譜。比較的簡明に勝ち切ることができたのは良かったと思う。

ここで、驚きの事態が発生します。なんと、準決勝に勝ち上がったのは全員私たちのブロックの人たちでした。道理で苦戦したわけだと思いながら、私の相手を確認したら予選で唯一敗北した H 君でした。当たりたくなかった相手ではありましたが、リベンジマッチということでワクワクしながら臨みました。

私の黒番です。落ち着いた布石からゆったりと囲いあう展開になりましたが、白 14 と黒を潰しにきました。この戦いは互角ながら、局所的な戦いならこちらに分があるとみて進めていきました。実戦では白 16 と這ったのが非常に窮屈で、一気に黒打ちやすくなりました。あとは非常に自然な闘いが続き、白も粘ったもののわかりやすく大石を取り切り、中押し勝ちとなりました。ここでトーナメントを確認すると、やはりというか勝ち上がったのは M 君。いよいよ雌雄を決する戦いが始ることとなりました。

また余白ができたので、9路のコラムでも書いておきます。日本ルールコミ 6 目半では白半目勝ちという結論が出ています。ゆえに、黒で勝ちたい場合は中国ルールコミ 7 目では引き分けになるが、日本ルール込み 6 目では黒半目勝ちという変化を研究するといいと思います。圧勝しそうが半目だろうが勝ちは勝ちなので、できるだけ相手にわかりにくい研究が良いのです。



全体的にかなり黒が戦いややすい形となった。白としては 16 の手で柔軟に 17 にツケるくらいで、それならかなり難解でよい勝負となる。

さてさていよいよ決勝です。握りで黒を引きましたが、黒の進行にも自信があったので大歓迎でした。序盤は頻出の形ですが、これは白 8 の時点で黒半目勝ちと結論が出ています。ゆえに、内心ほくそ笑んで打っていましたが、思えばこれが大ボカへの布石でした。白 12までは研究済みの形でどんな難解変化でも受けて立つ気満々でしたが、白は黒のキリに対して 14 と、誤った受け方をします。この手の何がまずいかというと、黒はすかさず右辺をストップして、逃げ出しの味が悪すぎて白かなり劣勢になるということです。(図1) それを研究していた私は、当然そこに打とうと思いましたが、なんと打った手は白のミスを補つて余りある大失着の黒 15 ! いやいや、せっかくの決勝戦でほんとに何をしているんですかね… 皆さんも手拍子には気を付けましょう。私みたいにならないでくださいね… それはさておき、この大失着をとがめる手が次に飛んできて私は絶望してほぼ負けを確信することとなります。それでは、次頁の図2を見て、ぜひその手を考えてみてください。

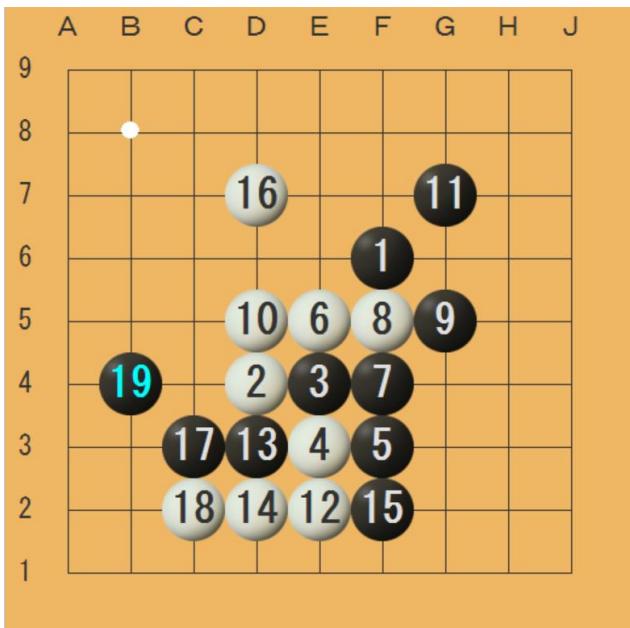


図1.15 と隅を抑える手がぴったりで、白はどう頑張っても逃げ出しをカバーできない。黒勝勢である。この次の頁を見て一手の過ちの大きさをぜひ体感してほしい。

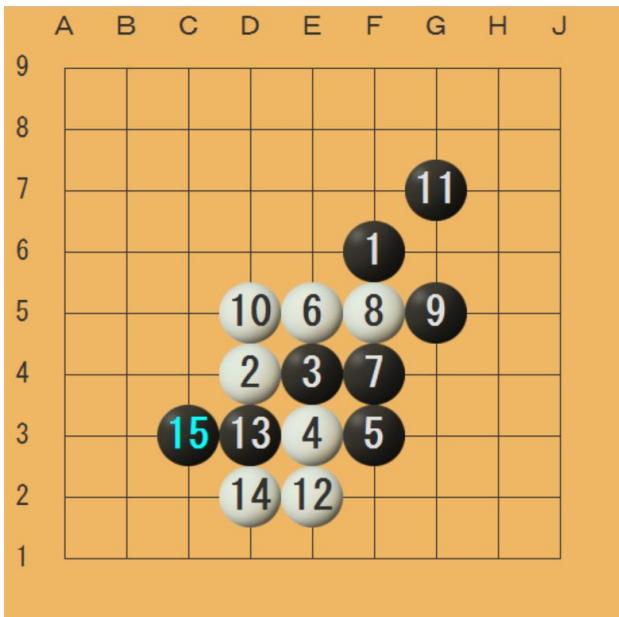


図2.実戦の黒 15 は手拍子の大失着。一番の正念場でこんなへまをやる自分には呆れてものが言えないですよ…

M君ほどの実力者がこの隙を逃すはずもなく、放たれた手は白16のキリです。これで黒はどうしようもなく痺れています。実戦の進行はここからの最善で相場ですね。しかし白20に黒ツゲないのが余りにも辛すぎる…なお、ツいてしまうと図3の締め付けがあり黒必敗形です。

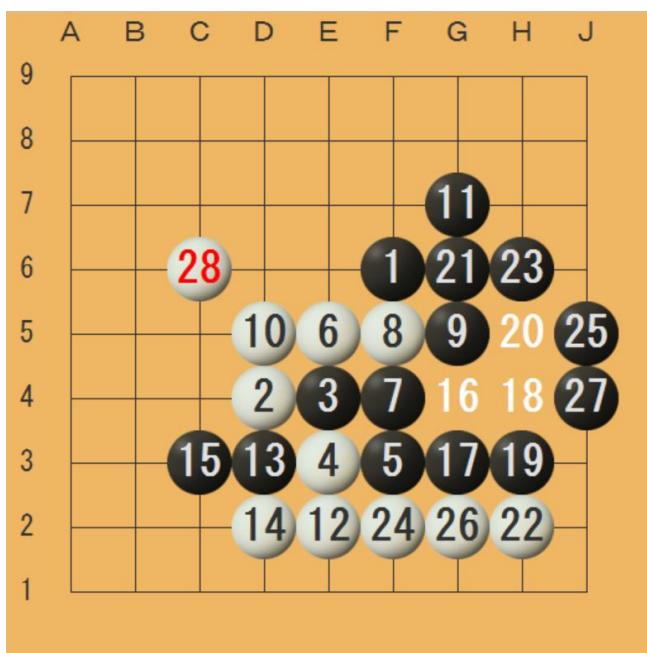


図 3.22 のツケからきれいに絞られて必敗。この形だけは避けなければならず、辛すぎるが 21 とツグわけにはいかないのである。

しかし私はまだ諦めるわけにはいきません。23まで辛いながら一段落しましたが、24のツケコシに25が勝負手です。下辺の黒が薄すぎて本来は絶対に戦えませんが、実力のあるM君だからこそ危ない勝負には乗ってこず妥協することを期待しました。そして、実戦は白が妥協し、少し得をすることができました。ここからはギリギリの勝負です。黒と白の意地の張り合いで、私は一直線で白の勝ちと読み半目負けを確信しましたが、実は私の読みには大きな落とし穴があり、黒33の手で逆転の糸口があったようです。

次項に図を載せておくので、ぜひ考えてみてください。

またまた余白ができたので、囲碁サイトについて紹介します。COSUMIというサイトがあるのですが、そこでは10段階に分けられたAIと日本ルールで9路盤の練習ができます。特にレベル9はとても良い練習相手になってくれるのではないかと思います。レベル0という強さを抑えたAIもあるので、級位者の方にも非常にお勧めできるサイトとなっております。

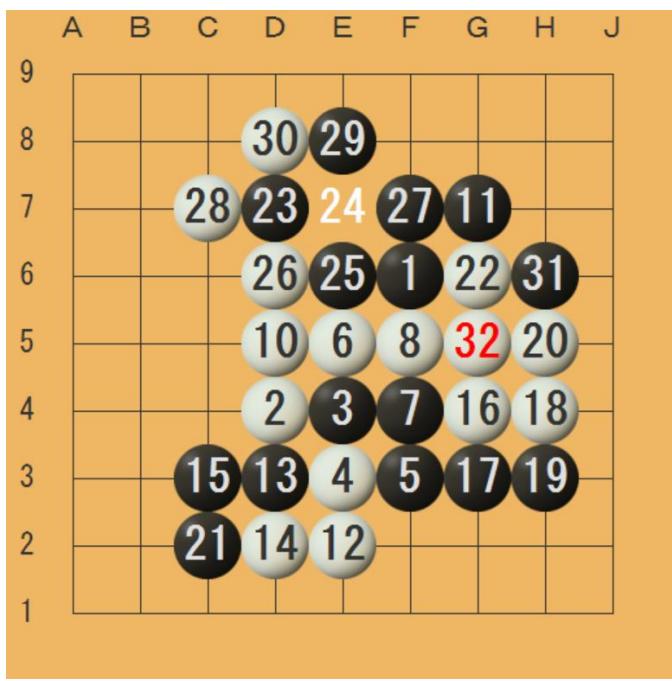


図 4. 私は半目負けは揺るがないと思っていたが、実は勝ち筋があったようである。これで黒勝てるというのだから、実に 9 路盤は奥深い。

なんと答えは上辺の黒を無視し、締め付けを回避する気合の 33！当然白は黒 31 の石を切り取ってくるが、黒は白に切り取らせてから 30 の石を切り、白がその石を取った後 37 と切り返し一線を渡り、シノいでいるというのです！

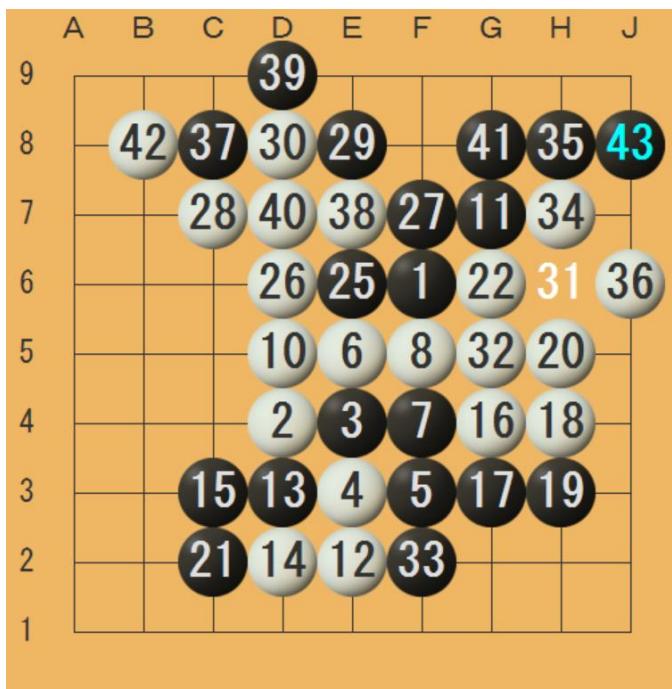
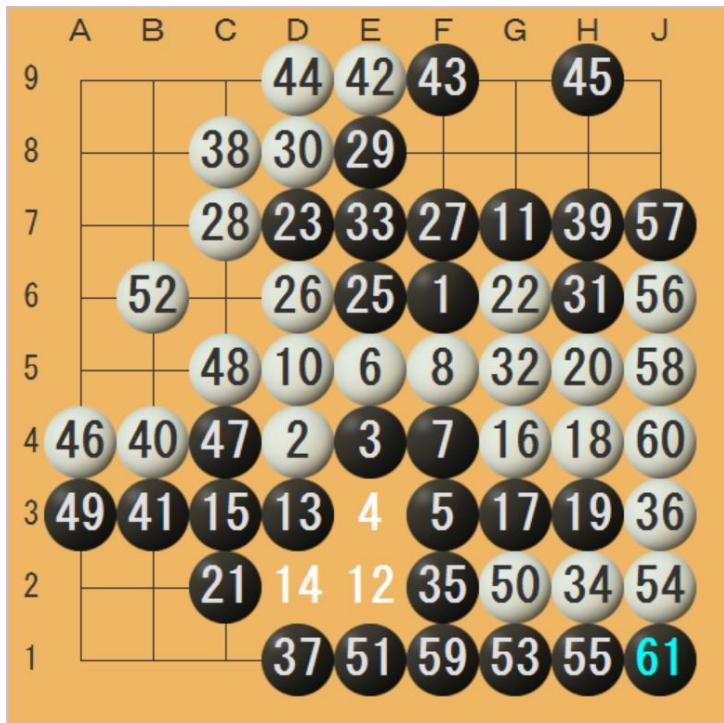


図 5. 27(40) 細いが勝ち筋はあったようだ。私は未熟ゆえにそれに気づくことができなかつた。

実戦は無難にコウをツギましたが、こうなれば後は一直線です。下辺を締め付けられて、41 の押しに最後の望みをかけましたが、M 君が間違えてくれるはずもなく、見事に半目負

けを喫しました。非常に後悔の残る内容となっていましたが、私の未熟さが招いたにほかならず、大いに反省しました。しかしながら、準優勝であっても来年の近畿大会の出場枠を1枠増やすことができたので、そこは満足しています。いつか私達の後輩が不甲斐ない私に代わってこの大会で優勝してくれたら、こんな幸せなことはありませんね…

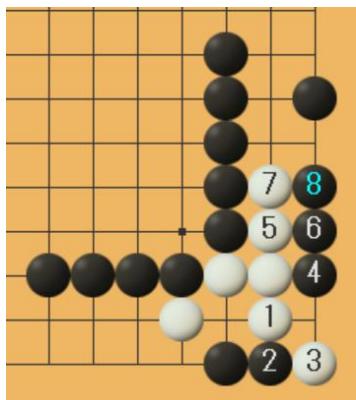


決勝譜。実に苦い思い出となったが、この敗戦譜が皆の戒めとなれば幸いである。

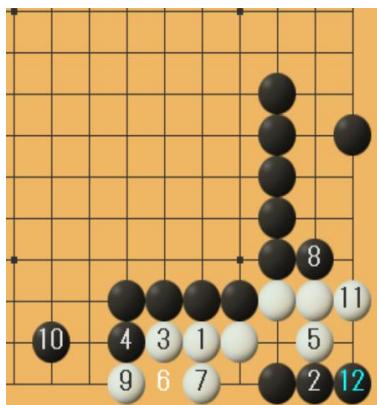
### 3. 終わりに

最後になりますが、部誌を読んでくださり、そして灘校囲碁部という場所に立ち寄ってくださったことに満腔の謝意を表させていただきたいと思います。  
私の文章がほんの僅かでも読者の皆様のお役に立てたならば、これほど光栄なことはありません。

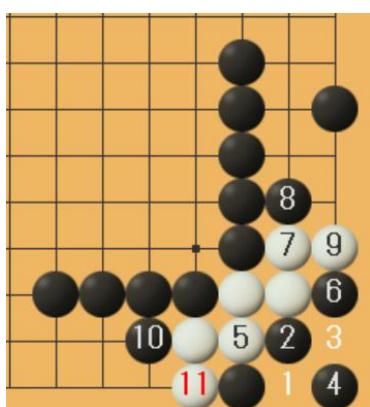
詰碁の解答.



失敗図 1.  
曲げてからの放り込みは  
4 が妙手で目ができる。



失敗図 2.  
白 1 には黒は受けずに  
這われて目ができる。  
逃げ出すこともできず  
隅の曲がり 4 目となる。



正解図.  
つけてからまくるのが良い手となる。これならば  
黒は抵抗できず、最後は珍しい両コウ生きとなる。

# 全国高等学校囲碁選抜大会参戦記

78回生 松崎・79回生 門川

こんにちは！高2の門川です。昨年度の3月に行われた全国選抜大会の団体戦に出場したのでそれについて書こうと思います。つたない文章ですがお許しください。

## 1日目（大会前日）

高3は主将の荒谷さん、副将で次の日の9路盤戦にも出場する足立さん 補欠の松崎さん高2は三将の門川 顧問の内田先生の5人で午後3時ごろに今回の会場の大坂商業大学の最寄り駅に集合しました。この日は試合はなく明日に備える感じです。~~なんで近畿代表なのに泊まってるんだろう~~。京都勢の先輩たちは前泊したほうが朝早く起きなくてすんで楽ですが、僕は大阪に住んでいるので後から考えたら泊まらないほうが楽だったかもと思いましたが、まあ楽しかったのでいいです。

先輩やOBの方の合否だったり期末テストの話をしながらホテルにチェックインして、夕食の時間まで荒谷さんの部屋に集まって対局しました。ここまで特に語ることはなかったです、困ります。普通に松崎さんに負けて明日が不安になりながら、夕食になか卯に行きました。他の店も探そうとしましたが、あんまりいいところがなく、結局去年と同じなか卯に。僕は消化のよさそうなうどんを食べました。僕は夏の大会は留学と重なって出場できず、今回が初の全国大会だったのでちょっと緊張していたと思います。食べながら新聞やブログで明日の順位予想みたいなのがみんなで見ていました。優勝候補は灘高校と夏合宿をいっしょに行った東京の駒場東邦（以下駒東）らしく、灘はベスト8ぐらいでした。灘校のところには「三将戦がポイントとなりそう」と書かれていて、三将の僕はより明日が心配になりました。（たぶんそんなにしてない。）後は食べながらみんなで詰碁をしていました。複数人でワイワイしながら詰碁を解くのは楽しいですよね。一人で詰碁をやるのは苦手って人におすすめです。

そんな感じでホテルに戻った後は、集まって軽く定石の研究をしましたが、結局すぐに飽きて対局がしたいということで、松崎さんの野狐というネット対戦アプリを4人で交互に打つことをしました。けっこう他の人の手の意味を考えたり、自分にない発想を学べたりと効果があった気がします。何より盛り上がって楽しく、明日の団結力を強められました。なぜか3連勝して松崎さんのアカウントの降段ピンチを救い、解散しました。その後慣れないユニットバスに苦戦して、ポケポケの新パックの情報（色違い実装）を見てテンションを上げて寝ました。（そんなに緊張してない）

## 2日目（団体戦）

朝起きてホテルで朝食をいただきます。ゆっくり起きるのが前泊の強みですね。朝食会場は大会参加者ばかりでした。朝食バイキングにたこ焼きや串カツなど大阪名物が並んでいて、他の参加者はとっていましたが僕は朝から重いのを食べる気にはならず、軽く済ま

せました。近畿なのに前泊していることに若干の申し訳なさを感じながら会場に向かいます。会場では夏合宿でいっしょだった駒東と感動の再会（？）を果たしました。

全国で会おうと言って実際に会っているのは胸アツですね、知らんけど。また、抽選の結果優勝候補の駒東とは最終戦まで当たらないかつ、夏の強豪校は別ブロックに固まっているというのもあり、追い風が吹いてきました！素晴らしいマッチング運の荒谷さんに感謝。一応団体戦のルールを説明しておくと、各チームの主将、副将、三将同士で対戦して、勝ち越したチームが勝ちになります。合計4戦で3勝までが入賞できます。ここから少し対局内容に触れるかもしれません、分からない人は適当に読み飛ばしてください。

初戦は神奈川の栄光学園とです。これもけっこうマッチング運がよくて、同じ勝利数になった場合対戦相手の勝利数をカウントするSOSというルールがあるので、初戦で強い学校と当たれるのはけっこう大きいです。僕の試合は、序盤に地を稼ぐことができましたが、相手の厚みと模様が大きく、相手の模様の中でさばけるかという勝負になりましたが、無事さばいて生きて勝ちました。灘校としては主将は負けましたが、副将は勝って無事初戦突破です。相手の主将の方は今大会全勝するぐらい強い人でした。全国大会は主将のレベルが本当に高いので、副将と三将でしっかり勝っていかないといけません。（フラグ）

2戦目は静岡の加藤学園高等学校とでした。こうやって全国の方と対戦できるのは旅行してる気分（？）になれてロマンがあります。結果は主副三全勝で勝利。試合後対戦相手の方が気さくに話しかけてくれました。こういう交流があるのも大きな大会の醍醐味ですね。また相手の主将の方は、東海ブロックの個人戦で優勝している強者だったらしいです。しかも全員高校から囲碁を始めたらしい、やばすぎる。囲碁は高校から始める初心者の方でも全国レベルになれる競技なので、やりたいことが見つからない方とかはぜひ灘校囲碁部に入ってみてください。

という宣伝もしつつ、3戦目は去年の優勝校でもある宮城県の仙台第二高等学校でした。去年の大会では仙台に負けたらしいのでリベンジマッチもあります。去年の主力選手は引退したらしいですが、それでも優勝候補の強豪校です。結果は序盤の定石で嵌め手というか僕がミスって大きく損をして、それが取り返せずに負けましたが、主将と副将が勝ち勝利。先輩達には感謝しかないですね。こうやってカバーしてもらえるのも団体戦の良さですが、ちゃんと負けたことは反省します。

ということで、無事去年の優勝校の仙台第二に勝ち、3連勝で決勝に進出しました。もちろん決勝の相手は駒東、全国で会おうと言って決勝で対戦できるのは激アツでしょう。また、決勝の大将の対局はパンダネットで全世界に配信されるというのもあり僕は関係ないけど、決勝戦ということを実感して気合が入ります。相手はここまで全員全勝と優勝候補にふさわしい快進撃をしている強敵です。特に副将の大門君は公式戦で何十連勝しているらしいです。さて、気になる結果は、主将と僕の負けで負けました。いやー、僕が勝っていれば優勝だったのは悔やまますが、強敵相手にけっこう競れた勝負ができたと思っているので満足です。そして、まさかの副将の足立さんが二段コウから勝負に持ち込み勝利しました。

駒東に全勝優勝させず一矢報いたのは流石足立さんです。僕もこれぐらいのパワーをつけたいですね、尊敬です。

この後は表彰式と大盤解説がありました。3勝1敗の灘校はSOSの結果3位でした。2位に秋田県立秋田高等学校は僕たちとは別ブロックで夏の強豪校たちとの接戦をすべて制していたらしいです。まあそれは秋田が強かったので仕方がないですね。マッチング運にも恵まれ、3位で表彰台に乗れてかつ、来年の近畿ブロックの出場枠も増枠することができたので、優勝は逃したもの上出来な結果だと思います。強敵ぞろいの主将からも勝ちをもぎとてくれた荒谷さん、全勝で3位に導いてくれた副将の足立さん、面白いことを言って盛り上げてくれたりサポートに徹してくれた松崎さん、引率してくれた内田先生には感謝しかねません。大盤解説では決勝の荒谷さんの対局が解説されていて、ここで素直に投了したのはすばらしいとプロの結城先生からフェアプレーを褒められて、気まずそうな荒谷さんがおもしろかったです。閉会式の後、来年の合同合宿のために、駒東の大門君とラインも交換できて良かったです。今年の夏にも開成高校と駒東と合同で合宿を行う予定なので、興味のある人はぜひ灘校囲碁部に入ってください！（また宣伝）

大会の後はサイゼリヤで夕食を食べました。足立さんが注文しすぎて苦しそうだったのが印象的です。賢いと言われる灘校生であれだけ囲碁が強くてもサイゼで注文しすぎます、そういうことです。明日は個人戦と9路盤戦があり、灘からは足立さんが9路盤で出場します。本人も自信大ありの優勝候補なので楽しみです。僕はもう帰りますが、荒谷さんと松崎さんは応援のためにもう一泊するので（もう1泊まりたかっただけかも）、明日の記事は松崎さんに任せます。長くてつたない文章をここまで読んでくださりありがとうございます。興味持った方はぜひ囲碁を始めてみてください！

ここからは高三の松崎が書いています。

二日目の夜に荒谷、足立、門川、僕、顧問の内田先生、灘OBの山中さんの六人でサイゼリヤに行ったところまでは門川が書いてくれているはず（執筆時、お互い何を書くかの打ち合わせは全くしていない笑）なので、その続きを書きたいと思います。

ホテルに戻り、一日目と同じく荒谷の部屋に集合。寝るまで何をするかという話になりました。翌日は足立が九路盤戦に出場するので、僕と荒谷は九路盤の研究をしようと提案しましたが、ここで足立が一言。「九路盤の研究はもう十分できている」と。もうなんか、流石やなって思いました。彼はこの大会に全てをかけてきた漢です。九路盤に関してはほぼ素人の僕と荒谷が出る幕ではないと一瞬で悟りました。ということで、YouTubeで「囲碁棋士柳時熏のGo Channel」を見ることに。囲碁棋士の柳時熏先生が配信しており、非常に勉強になるチャンネルです。ですが、丸一日囲碁を打った荒谷と足立はすぐに「もう囲碁はお腹いっぱい」となってしまいました。足立は翌日も戦うのでもう解散しようかという話になりましたが、ここで足立が衝撃の一言。「九路盤は正味、暗記と運だから睡眠はあまり必要な

い」と。絶対嘘やんって思いましたが、AI を駆使して九路盤を終局まで研究している彼の言葉なので、我々は反論することができませんでした。ということで、まだ解散せず。でも囲碁はお腹いっぱいだったので、囲碁に関する何かをしようという話になりました。そこで僕が提案した「Hit&Blow」というゲームをすることに。詳しいルール説明は省きますが、相手の考えている数字をいくつかの断片的な情報から推理して当てるというゲームです。通常は二人で行うゲームなのですが、三人で行えるようルールを少し工夫しました。これがまあ死ぬほど面白かった。かなり頭を使うゲームを、丸一日戦って疲労が溜まった状態でやるのを想像してみてください。もう三人とも頭が働いていないから意味不明なムーブばっかするわけですよ。僕が 5674 という数字を考えていた、荒谷と足立がその数字を推理するターンの時。一ターンにつき二回の解答権があるというルールにしたのですが、そのターンでの一回目の解答は 4675。僕はもうそろそろ当てられそうだなと思いながら「2 ヒット 2 ブロー」と答えました。ヒットは数字も桁も一致しているという意味、ブローは数字は一致しているが桁が違うという意味です。そこから二人はまた真剣に考え始めました。ですが、五分ほど長考に沈んだ後の二回目の解答もまた 4675 だったんです。もう笑い転げました。「今の五分の長考は何だったの?」と。疲れ切った頭では五分前に何と解答したかの記憶さえ難しかったようです。2025 年で最も楽しい瞬間でした。その後、やはりちょっとは囲碁をしようという話になります。ですがやはり疲れ切っているので、普通の囲碁は荷が重い。そこで白羽の矢が立ったのが「九路飛刀」という囲碁の派生ゲームです。「野狐囲碁」というインターネット上の囲碁サイトでできるんですが、これがまあクソゲーで。詳しいルール説明は省きますが、とにかくクソゲーで。荒谷のアカウントを使い、三人で交代しながら打っていたのですが、何度も勝つことができません。三連敗したあたりでクソゲーだと気付くのですが、負けのままやめてしまうとそれは真の敗北になってしまい、勝つまでは終われない、という謎の負けず嫌いが出てきました。結果、九連敗を喰らった後にかろうじて一勝。二度としません笑。



その後、さすがに解散して、各自の部屋で風呂に。一日目の夜、僕は風呂に入りながら荒谷とビデオ通話しました。目的はありませんが、去年からの恒例行事なのです笑。ですが二日目はさすがに疲れていたのでしました。

三日目、九路盤戦の日。足立にとってはこれまでの研究の成果を出すべき決戦の日です。僕と荒谷は応援。気楽なもの。足立は気合も自信も十分。優勝しか狙っていないと言つていましたが、彼の九路盤に対する熱意や努力を知っている我々からしたら説得力しかあ

りませんでした。大いに期待すると同時に、こんな友達がいることが誇らしかったです。

七時からホテルで朝食を取り、その後チェックアウトして大会会場へ。大会運営のバイトで雇われていた灘校囲碁部OBの米谷さん、個人戦出場の内田くん(雲雀丘学園高等学校)、北野くん(兵庫県立西宮南高等学校)、草木くん(同志社国際高等学校)、九路盤戦出場の大城くん(慶應義塾高等学校)などに挨拶しました。いよいよ始まるとボルテージも上がってきましたところで足立の初戦の相手が判明。なんと、昨年優勝者の超強豪、宮本くん(熊本県立熊本高等学校)だったのです！いきなり頂上決戦となりました。まだ予選ブロックなので一応負けても大丈夫、と思っていましたが、結果は足立の半目勝ち。失礼しました。一応負けても大丈夫とかほざいていた自分がアホらしく思えました。昨年優勝者に勝つのはさすがにえぐいです(語彙力皆無)。宮本くんも流石にこれは誤算だったんじゃないかな。ホントに足立がカッコよかったです。マジで死ぬほどカッコよかったです。どこで勝ちを確信したのかを聞くと、まさかの「初手」でした。「は？」と聞き返しましたが、宮本くんの初手は完全に足立の研究範囲内であり、終局まで研究済みの足立は半目勝ちという結果を初手で確信したそうです。もう意味分からんわ。

その後も順当に勝っていく足立。僕と荒谷は控室にある十九路盤で囲碁を打ったり、詰碁を解いたりしていました。やがて足立は予選ブロック突破。一局やらかして五勝一敗でしたが、堂々の一位通過。見事でした。

個人戦は期待していた内田くんがまさかの初戦負け。去年の全国高等学校囲碁選手権大会全国大会個人戦準優勝の彼は僕にとって雲の上の存在ですが、そんな彼が初戦で負けたことで、この大会のレベルの高さを実感しました。内田くんが負けた相手は結局準優勝だったので、仕方ない部分もあるのかなと。内田くんにはリベンジ頑張ってほしいです(何様やねん笑)。一方北野くんは二連勝。流石だと思いました。院生だった彼は去年から高校大会に出場するようになったので、僕は彼が一個歳下だと思っていました笑。ごめんね。彼は僕と同級生です。

昼食を取っていざ決勝トーナメントへ。足立と宮本くんはグループが分かれたので決勝まで当たることがないと知り、一安心。一回勝ったとはいえ、やはり強豪とは当たりたくないですからね。足立はどうだったか知りませんが。僕と荒谷は控室で待機。本コウと二段コウを勘違いして簡単な詰碁を解くのに三十分かけるなど、睡眠不足により精彩を欠く我々とは裏腹に、足立は圧倒的な強さで見事決勝進出を決めました。そして決勝の相手はやはり宮本くん。何かの因縁なんですかね？頑張って来いと言って送り出しました。

結果は足立の半目負け。惜しくも優勝を逃しました。後で足立に聞くと、正しく打っていれば足立が勝つはずの布石だったそうです。足立は相当悔しがっていましたが、僕は準優勝でもホントに凄いと思いました。選抜大会九路盤準優勝は藤本先輩以来の快挙です。マジで何度も言いますが素晴らしい成績だと思います。しかも足立は前日の団体戦決勝でも、駒場東邦高等学校の副将で公式戦十九連勝中だった大門くんに勝ったし、もうホントに尊敬するしかなくて尊敬しています(語彙力皆無定期)。ホントに凄い！！！！

個人戦は北野くんが四位、内田くんが五位でした。三位までに入れなかったのは少し残念ですが、素晴らしい成績だと思います（マジで何様やねん定期笑）。男子団体も灘が三位入賞し、優勝の駒場東邦高等学校をあと一步まで追い詰めました。女子個人では松田さん（兵庫県立神戸高等学校）が三位、女子団体では洛南高等学校が五位と、大会を通して色々な部門で兵庫勢、近畿勢が活躍したと思います。僕は団体戦補欠なのでほとんど何もしていないに等しいですが、この快挙に少しでも貢献できたとするならば、非常に誇らしく嬉しいです。

大会が終わった後、荒谷と足立と三人で夕食に行きました。内田先生からお金を頂いたのです。内田先生のポケットマネーなのか学校の金なのかは定かではありませんが、領収書を取って来いと言われなかつたことを考えると前者なのかなと思います。梅田の阪急三番街にあるフードコートで僕と足立は仙台牛タンを、荒谷は讚岐うどんを食べて打ち上げました。この三日間、ホントに楽しかったです。良い思い出ができました。この辺で筆を置こうかと思います。読んでくださいありがとうございました。

P.S. 一応領収書は取って内田先生に返しておきました笑。